

明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり



特集 ■ 川を活かしたまちづくり

11

2009

ISSN 1340-8817

1 巻頭エッセー ● 目指せ!「ミュージアム都市」

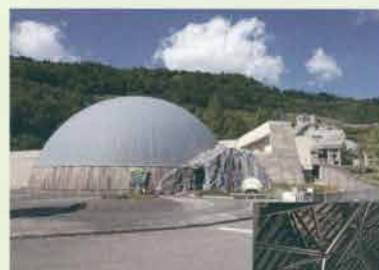
奥山恵美子(仙台市長)

特集 川を活かしたまちづくり

- 4 川のデザイン本格化の時代 篠原 修(政策研究大学院大学教授)
- 8 北海道旭川市 高齢者にも優しい水辺のにぎわい 熊谷好規
- 10 福島市 荒川を市民活動のフィールドに 佐藤光憲
- 12 千葉県松戸市 流域各地の「川の駅」が交流の場に 小川信次
- 14 新潟県長岡市 広大な河川敷は市民の憩いの場 中川信行
- 16 名古屋市中区 「戸田川発見隊」の水辺環境づくり 富安孝典
- 18 三重県伊勢市 勢田川の舟運の再生をめざして 高橋 徹
- 20 大阪市 道頓堀川の水辺空間利用を推進 大阪市建設局下水道河川部河川担当
- 22 広島市 「水の都ひろしま」の社会実験 高野正徳
- 24 徳島市 市民とともに水辺の魅力高める 川口博史
- 26 筑後川流域4県 筑後川流域圏の経済自立めざす 駄田井 正
- 28 「かわまちづくり」支援制度の創設 古市秀徳(国土交通省河川環境課流域治水室課長補佐)
- 31 「川の駅」が大阪にも、東京にもできてきた! 田中栄治(NPO法人地域交流センター代表理事)
- 35 川を軸に地域連携を拡大 編集部



一向一揆の砦となった鳥越村の城跡

登録有形文化財の北陸電力福岡第一発電所
(白山市河内町地区)

白山恐竜パーク白峰



金剣宮を繰り出す神輿



恐竜パーク内の展示物

レギュラーレポート

- 36 地域再生実践塾 平成21年度第3回
「景観によるまちづくり」 長野県小布施町
- 38 団体探訪
歌声列車の会
ローカル線に地域づくりの夢を乗せ 兵庫県加古川市
- 40 「OH!! 鰐 元気隊」
希望ある元気な町をめざして 青森県大鰐町
- 42 ～北から南から～ 長野県上田市
映画ロケのまち、上田の熱気 松井宏典
- 44 地域だより
- 45 首長の思い「思いやりある市政」実現へ全力 島村 穰(上尾市長)
- 48 センター通信

グラビア

2 川を活かしたまちづくり

- 46 都道府県漫遊●鳥取県 47 手前みそですが…●神奈川県綾瀬市



若者らによる獅子舞の演舞

●表紙Ⅱはうらい祭り (石川県白山市)

白山市の指定無形民俗文化財「ほうらい祭り」が十月三、四日、同市鶴来地区で催された。金剣宮の秋季例大祭に伴う行列神事で、長い歴史を受け継いだ神輿を若者たちがかつぎ町内を練り歩く。その神輿の露払い役の獅子舞、太刀持役の造り物が巡行する。

名物の造り物は、各町の青年団が毎年趣向を凝らし、仕事の合間に一カ月近くかけて完成させる。背丈が四、五メートルある人形で、今年は五体造られた。巨大な造り物と獅子舞の演舞は、各町内をゆっくり回りながら、神輿渡御を盛り上げる。

造り物には、収穫された五穀野菜などがあしらわれ、その年の豊作を感謝し、翌年の無事を祈る意味を込めているという。

白山市は平成十七年二月、金沢市と小松市の間に位置する八町村が合併して誕生した。白山麓を流れる手取川には、白亜紀の恐竜化石などが出土した「桑島の化石壁」がある。その付近の「白山恐竜パーク白峰」は、家族連れや子供たちでにぎわう。

●文：原田 ●カメラ：小形又男



仙台市長

● 奥山恵美子

目指せ！「ミュージアム都市」

本年八月、第三十三代の仙台市長に就任いたしました。仙台市は、明治二十二年の市制施行から百二十年、また、平成元年の政令指定都市移行から二十年の大きな節目を迎えています。この時に当たって私は、これからの仙台の新しい街づくりの方向性として「ミュージアム都市構想」という考え方を新たに掲げました。

私たちは今、高齢化の加速的進行や人口減少社会の到来、右肩上がりの経済成長の終焉、地球的規模の資源環境制約の高まりなど、いわゆる成熟した社会を迎えています。当然、本市もこの趨勢の中にあり、近い将来には人口が減少に転じ、高齢化率も急速に高くなっていくものと見込まれています。

このような成熟社会では、人々の価値観も「量から質へ」と転換し、求められる「豊かさ」の意味合いも変わります。そうした「豊かさ」を実現する鍵の一つが「学び」であり、この「学び」をキーコンセプトとした街づくりが、私の考える「ミュージアム都市構想」です。

私は「学び」を街づくりに生かしていくためには、①量的拡大、②質的向上・ネットワーク化、③多層化の三つのフェーズがあると考えています。

「学び」には学習、体験、遊び等さまざまな要素があります。これらをつなぎ合う場が「ミュージアム」であり、これら多様な「学び」を提供する「ミュージアム」を数多く創り出していく、これが第一段階です。博物館や美術館、動物園等の公共的施設はもとより、民間の展示スペースなども有効に活用していきたいと考えています。

次に、「ミュージアム」を単体としてのみ存在させるのではなく、互いに密接な連携を持たせることによって、全体としての質や発信力を高めていきます。これが第二段階です。

そして第三段階が、街そのものや風土そのものを「ミュージアム」として捉えていくことです。例えば、田園や里山の自然、遺跡などの歴史的遺物、祭りや伝統行事といった無形の地域資源：これらごく日常的な風景に、「学び」という視点から新たな光を当てることで、その価値を再発見できるものと考えています。

こうして自然や歴史、文化などさまざまな「学び」のテーマが街の中で多層的に織り合わされ、仙台市全体があたかも一つの大きなミュージアムとなっていく、これが私の目指す「ミュージアム都市」であります。

こうした取り組みは、長く「学都」として培われてきた仙台の伝統、市民意識を踏まえたものであり、本市全体の魅力をさらに向上させるものと考えています。また、活気ある地域づくりや高齢者の生きがいづくり、環境学習・環境教育など、さまざまな分野につながっていくことも期待できます。

仙台市では、全国に名を馳せた脱スバイク運動を始めとする広範で自発的な市民の活動によって、さまざまな分野の街づくりが進められてきました。仙台七夕まつりや仙台・青葉まつり、光のページェントなど、市民が主体的に関わるイベントも数多く行われています。

私は、こうした仙台市民の底力を「行動する市民力」と呼んでいます。が、「ミュージアム都市構想」を支えるものは、間違いなく、この「行動する市民力」だと考えています。市民とともに一歩一歩、構想の実現を目指していきたいと思っています。

全国の皆さん。ぜひ仙台にお越しください。四季折々に見どころ、「学び」どころがたくさんあります。ゆっくりと時間をかけて、街を歩いてみてください。数多くの発見があるはずです。お待ちしております。

川を活かした まちづくり



桜つつみと吾妻連峰（上）
探訪会は新しい発見が
いっぱい（右）

● 福島市 (p10-11)



江戸川のゴルフ場前の「川の駅」（左）
松戸市の川の一里塚（堤防上）でのリバーカフェ（右）

● 千葉県松戸市 (p12-13)



石狩川河川敷リベラインパーク（上）
旭川冬まつり（下） ● 北海道旭川市 (p8-9)



信濃川河川敷での花火大会
● 新潟県長岡市 (p14-15)



市民らによる戸田川清掃活動 ● 名古屋市中川区 (p16-17)



道頓堀川水辺の物販展示イベント

● 大阪市 (p20-21)



河崎川の駅のにぎわい ● 三重県伊勢市 (p18-19)



LEDの光で彩られた新町川水際公園

● 徳島市 (p24-25)



水辺のコンサート (上)
京橋川オープンカフェ (下) ● 広島市 (p22-23)



筑後川流域の風景 (上) 久留米大学市民講座 (流域講座) の様子 (右)

● 筑後川流域4県 (p26-27)





川のデザイン本格化の時代

—川を整備すればまちは大きく変わる—

1. 戦後の河川整備

敗戦直後にわが国を襲ったキャサリン台風、ジェーン台風などにより利根川をはじめとする大河川は、未曾有の氾濫を経験する。この経験から出発した戦後の河川行政が治水一辺倒になったのもやむを得なかったのだろう。その一方で、産業は徐々に、そして着実に復興を遂げ、昭和三十年代に入ると大都市への人口集中が問題視されるに至る。河川は急激に汚れ始めていた。

筆者が泳いだ多摩川丸子橋付近では洗剤が泡立ち、これは後に河川の宮村忠氏に聞いた話だが、あまりの異臭故に隅田川に蓋をかけることが真剣に議論されていた時代だった。この水質をも含む環境汚染（公害）対策が昭和三十年代後半から四十年代の課題だった。昭和四十七年には環境庁が設立される。

経済成長期に河川行政は
環境面で二つの施策

このような時代状況を受けて、当時の河川行政は環境面で二つの施策を打ち出す。その一は昭和三十九年開催の東京オリンピックを受けての河川敷の開放、スポーツグラウンド化の推進であり、その二は水質改善に続く環境護岸・緑化護岸・景観護岸の整備だった。この二つの施策はそのいずれもが、洪水防禦や水質改善といった受身の施策から、今日の川づくりにつながる積極的な方向性を持つていたと評価できる。

しかし、そこには根本的な思考法の欠陥があった。それは「単機能主義」と言うべき、計画・設計についての認識の誤りである。我々が手にする「もの」や、我々が行動する空間には一般に多様な機能が期待されている。例えば、この原稿を書いている万年筆を例にとってみよう。



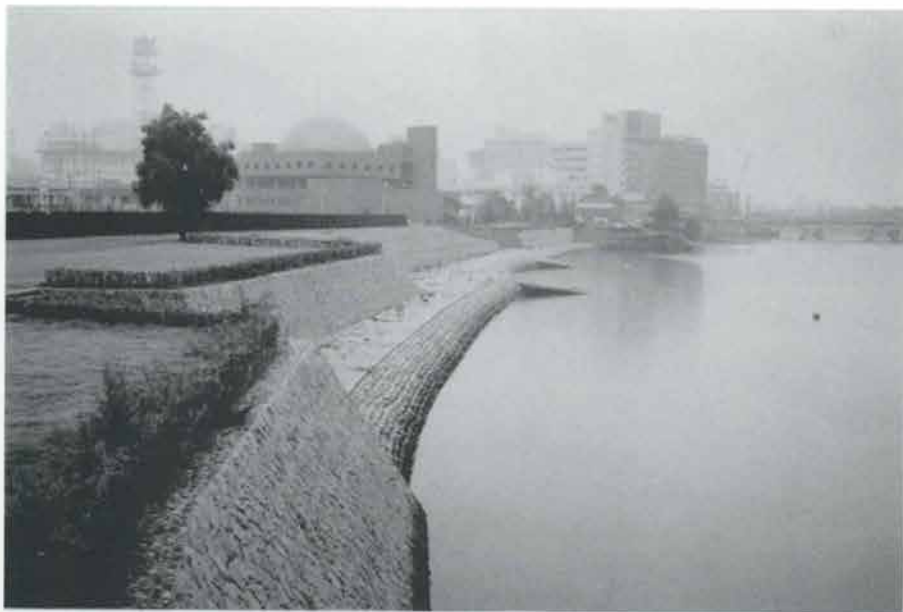
政策研究大学院大学教授 ● 篠原 修

筆記用具だから当然のこととして、文字が書けなければ困る。これが、要請されている第一の機能であり、不可欠の機能である。しかし求められている機能はそれのみではない。

握り易い太さ、長時間書き続けても疲れない適度な重さと重心のバランス、自分の万年筆であると思える外観の形、色、肌ざわり等々。求められている機能は多様にして多数である。これらの多様な機能に込めつつ、それを「統合」して一本の万年筆とすることがデザインの本質である。

単機能主義デザインによる
河川事業の問題点

戦後の治水行政は、洪水を防禦するという機能に特化した事業だった。一刻も速く洪水を海へ流すことのみを考えたその結果は、コンクリートの護岸、長大な堤防となって現れた。都市河川は三面張りのコンクリート排水路と化した。



戦後の本格的な都市河川デザインの嚆矢となった太田川（広島市）

人びとが河川に期待している多様な機能、例えば水遊び、釣り、水辺の散歩、絵を描きたい——といった要求は、一切無視されたのである。これが、一つの機能しか考えない単機能主義のデザインであり、それはデザインとは言えないものである。人びとに評判が悪かったのも当然だと言わざるを得ない。

この根本的な発想の欠陥をそのままにして、環境や景観の要請に応えようとしてつくられた前述の護岸は、無惨な結果をもたらした。

コンクリートに穴をあけただけの魚道ブロック護岸や無理矢理に草を植え込んだ緑化護岸等が出現した。前者では魚のこのみを考え、後者では緑を増やすことのみに終始する、やはり単機能主義の発想なのである。これらの護岸もやはり評判は悪く、やがて見捨てられることとなる。

この反省と、故・関正和氏をはじめとする自然派の努力が実って、河川行政は多自然型工法の時代に入る。コンクリートに替えて、木、石、土という自然材料が用いられ、河川は自然を取り戻す。

水辺や水生の植物、昆虫、魚類は豊かになりつつある。しかし筆者に言わせれば、この多自然型工法も、やはりその根底には単機能主義の発想が巣くっている。自然のこのみを考え、河川を利用し育てる人間が不在なのである。

お手本とした南ドイツ、スイスと違い高温多湿なわが国では、多自然型工法一本槍の水辺は人間を寄せ付けない。河川の、そして流域の特性を踏まえた多様な要請を統合したデザインは、いまだ不在であると言わざるを得ない。

2. 「太田川」以降

上記のような表面的には治水至上から各種護岸へ、さらには多自然型工法へと変化してきた整備法にもかかわらず、根底には一貫する単機能の発想に棹さしたのが、中村良夫さんをリーダーとする広島太田川の整備だった。

中村さんは、自らの研究室のメンバー、北村真一、岡田一天、斎藤潮、小野寺康らの諸

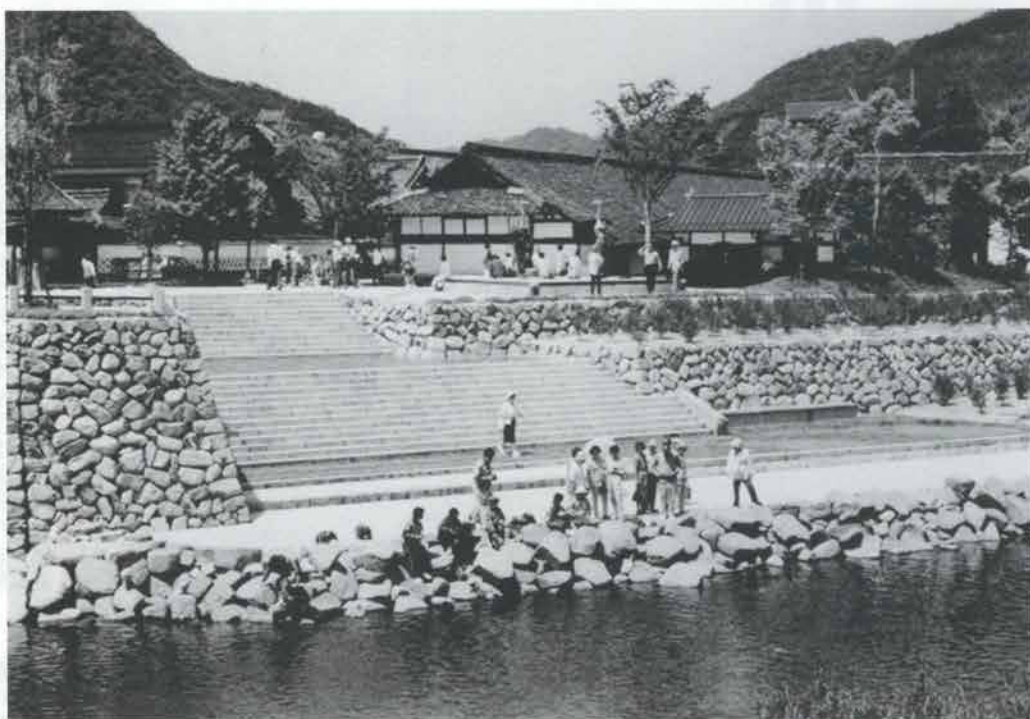
氏とともに、太田川の伝統的河川工作物を生かし、沿川の土地利用、施設と川の連続性を考え、また原爆ドーム等の場所性を踏まえたデザインを展開した。その多様な要請に応じようとするデザインの特徴は、中村らが描いた平面図によく表れている。

河川の状態と人々の水辺の利用に応じて、階段や広場がとられ、水制工が設置され、それに応じて護岸や堤防の断面、素材は変化する。従来のやり方、つまり各地点で断面を切り、それをつなぎ合わせて河道と高水敷の形を決めるという方法を採らなかったのである。

従来の発想を変えた 太田川の河川デザイン

この平面（プラン）から入り、それに対応して断面（セクション）を決めるという発想こそ、正しいデザインの手順なのである（同様の線状の施設である道路においても同じ）。ここに初めて、発想上も手順においても正道を行く、都市河川のデザインが実施されたのだった。

昭和五十年、六十年代には太田川のみだった河川のデザインは、平成の時代に入って幾つかの好例を生み出すことになる。岡田一天さんと筆者による島根県津和野川、伊藤登さんによる阿武隈川・渡利地区（福島県）、吉村伸一氏による横浜市和泉川・東山、関ヶ原など。これらは水の流れの表情を生かし、河川敷外の土地をも取り込んで気持ちのよい河川空間を実現している。従来からの断面先導にとらわれず、非対称断面が大胆に採用されていることも特徴の一つである。



山陰の小京都・津和野の中心を流れる津和野川（島根県津和野町）

富兵庫の樋を復元デザインしたものであり、後者は明治から大正・昭和戦前に積まれた石積護岸の修復の上にデザインを展開したものである。

以上に述べたように、都市河川のデザインが本格化するのには戦後も四十年以上を経た平成の時代に入ってからのことである。しかし、戦前にはそれが皆無であったかと言うと、そんなことはないのである。これは橋のデザインとも軌を一にするのだが、大正から昭和十年前後にかけて、今日見ても素晴らしい都市河川デザインが展開されていたのである。典型例を挙げると、城崎の大谿川、兵庫鳳凰川、京都鴨川などである。

3. 川の魅力再考

人間が創り出すものには、例えば車、建て売り住宅はもちろんのこと、橋すらも同じものが多いが、自然と人間の合作である川には、同一のもの一つとしてない。従って、個々の川を一般化してその魅力を語るのには些か矛盾しているのだが、よくデザインされた川を見ていると、そこにはある種の共通性が存在すると思える。それが何であるのかを、以下に素描してみたい。

世に絶景と言われる展望台に登って、風景を見渡す。あなたはそこに何分とどまっていられるだろうか、同じ風景を見続けて。三分はもたない。

それが常識的な所であろう。では何故か、その理由とは簡単で、風景に動きがないからである。自らが動くのもよし、見ている対象が動くのもよし。人間と言う動物は変化を欲するのである。

小魚や蝶がいる水辺で子供らが遊べる川の魅力

一転して、今度は川の辺に佇む。水面を見続けても飽きることはない。生々流転、水は変化し続ける。これが川の魅力の根源である。止水の湖や沼にはこの魅力はない。従って川のデザインの最大のポイントは、水の流れをいかによく見せるかに尽きる。さらにここに、生物の動きが加わる。泳ぐ小魚、沢ガニ、季節によっては蝶やトンボ、バッタ：等々。川の風景は動きに満ちている。それ故にこそ、自らも変化してやまない人間に、生きていくことを実感させてくれるのである。

もちろん、ここに水辺でザリガニを追う子供たちの動きが加わるとなおよい。1. の戦後の河川整備で述べたように、水辺に近づけてこそ川の魅力なのである。

動きは視覚と身体感覚を通じて獲得される。しかしそれのみでは川の魅力は十全に味わうことはできない。サラサラと流れる水の音、聴覚がこれに加わり、水に手や足を浸すことにより得られる触覚が川の豊かさを実感させてくれる。それは山道を登って一息ついた時の沢水の冷たさである。

さらに、北原白秋はこう独白する。故郷の川、沖ノ端川はなつかしい鳩の匂いがする、と。思い返してみれば、多摩川中流には都市郊外の匂いがあり、母親の故郷・栃木の家の裏の川には、岩の

また掘割りや運河により近い例としては、小野寺康さんによる浦安市境川、桑名市住吉入江がある。さらに近年に至ると、文化財の保存・修復と河川デザインが一体化する事業が行われ始める。吉村伸一、島谷幸宏、逢沢正行さんらによる佐賀県石井樋のデザインや、小野寺さんと筆者による宮崎県油津堀川がその代表であろう。前者は成



横浜の住宅地の小河川、和泉川（横浜市東山地区）



石積護岸を復元、デザインを展開した油津堀川運河（宮崎県日南市）

香りがついていた。

また、タイのチャオプラヤ川には泥とハスの入り交じった匂いがあった。魚臭い匂い、クレソンの匂い、コケの匂い、それは小さい頃の川遊びとともに思い出される川の匂いである。それは現代人が忘れてきている川の原体験にほかならない。

これほど魅力に溢れたデザインの対象があらうか。橋、街路、広場、駅など、一通り土木のデザインを手がけてきた筆者の実感である。

4. 一段飛躍した川のデザインのために

多自然型工法によって自然を取り戻し、本格的なデザイン実践により人間不在を解消しつつある川は、今後どのような方向を目指せばよいのだろうか。

その一つの方向は、前項にも紹介した文化的行政との連携であらう。治水、利水の長い歴史を有するわが国の河川には、堰、閘門、水勢工を始め

として文化財クラスの遺産が数多く残っている。

宇治川ではつい最近、太閤堤が発見されて大きな話題を呼んだ。これらの文化財を保存、修復しつつ、いかに魅力的な河川空間を創出するか、河川技術者の度量と腕の見せ所とならう。

まちづくりと一体化した 河川の整備

第二の方向は、都市計画、まちづくりとの一体化であらう。橋、川、街路・広場、

駅と仕事をやってきた。川の仕事がいかに大きな影響力を持つことを実感している。橋を架けても街はそう変わらない。川を整備すれば町は大きく変わる。

津和野はその典型だった。そして堀川運河により日南のまちも今、大きく変わろうとしている。

まちづくりのカギを握っているのは川である。古いことを言えば、城下町の縄張り（都市の全体計画）を担ったのは、河川と掘割を設計・施工した河川技術者だったのだから。

（参考文献）

- (1) 岡田 一天…河川環境整備の歴史、篠原修編「都市の水辺をデザインする」彰国社、2005
- (2) 国土交通省・国土技術政策総合研究所…景観デザイン規範事例集（河川・海岸・港湾編）、2008



高齢者にも優しい水辺のにぎわい

—市民・観光客が親しめる河川敷を整備—



旭川市総合政策部 まちづくり推進課 主査

● 熊谷好規

北海道のほぼ中央に広がる旭川市は、豊かな自然に恵まれ、四季が明瞭な大変美しいまちである。

人口三十五万人を超える北海道第二の都市として、充実した都市機能が整備されている一方、郊外には田園地帯が広がり、都市と自然が美しく調和した魅力的な景観をつくり出している。

また、全国有数の米どころとして知られる農業をはじめ、世界的にも注目されている旭川家具やパルプ、食料品などの製造業や卸・小売業など多様な産業を有し、道内唯一の中核都市として教育や医療などの都市機能が集積する北海道の拠点都市である。

市内には、国内外から大きな注目を集めている旭山動物園をはじめ、全国区となった旭川ラーメンや国内有数の雪質を誇るスキー場などの多くの観光資源を有し、近年、国内外からの観光客も著しく増加している。

このように、旭川市は、恵まれた自然の豊かさを感じながら、本市ならではの文化や産業などを大切に育んできた活力あふれるまちである。

（川に親しみを感じ 市民が日常的に利用）

旭川市は、大雪山系を源流にもつ石狩川、牛朱別川、忠別川、美瑛川の四大河川をはじめ、大小合わせて百六十を超える河川が市内を流れる「川のまち」である。そのため、市民はとても身近に川の自然と触れ合うことができ、川に親しみを感じている。

石狩川河川敷では、北海道を代表する冬のイベントで毎年百万人の人が訪れる「旭川冬まつり」をはじめ、花火大会やマラソン大会など、四季を通じて様々なイベントが数多く開催されている。また、牛朱別川の洪水対策として新たに整備された永山新川では、地元のNPOが中心となつて、子どもが安全に川で遊べる水辺づくりやカヌー講習会など、川とふれあうイベントが開催されている。

その他の河川敷でも、サイクリングやウォーキング、自然観察会、さらにパークゴルフなどに活用されているほか、自転車・徒歩による通勤・通

学など日常的な利用がととても盛んである。

（車椅子の人も気軽に利用できる 福祉の川づくりに注力）

このように「川のまち」である旭川市では、潤い豊かな都市環境の形成とともに、日常空間の一部として河川空間を有効活用していくことが重要であるとの考えから、健常者だけでなく、車椅子や高齢者にも気軽に河川敷を利用できるよう「福祉の川づくり」を市中心部で進めている。

当地区は、旭橋を挟んで総合公園である常磐公園と近接しており、河川敷地内には、手すりやスロープのほか、噴水池やフラワーガーデンなどの施設が整備され、川の持つ癒し・憩いの効果を最大限に活用し、医療・福祉活動の場、人々の交流の場としての空間を創出している。

また、現在、JR旭川駅周辺において、土地区画整理事業、鉄道高架事業、街路事業、河川空間整備事業を主要事業とする「北彩都あさひかわ」整備を進めている。この整備のコンセプトも川の魅力を最大限に活用した「都心オアシスの形成」であり、川の織りなす姿があらゆる空間形成の原点となっている。

「川のうねり」など急流河川ならではの自然特性を活かした遊歩道や堤防の整備、さらに霞堤を活用した大池の整備など、川との出会いがより印象深いものとなる空間を形成している。さらに、平成二十二年秋開業を目指す新しい旭川駅は、忠別川に面する「川に接する駅」であり、自然豊かな河川空間と多くの人が賑わう買物公園を結ぶ魅力的な駅となる。



河川敷にあるパークゴルフ場



緩傾斜化された堤防と「川のうねり」を意識した遊歩道



川辺での自然観察会



フラワーガーデン

旭山動物園効果をどう 中心市街地に結びつけるか

現在、全国的に有名になった旭山動物園効果で、本市を訪れる観光客は年々増加しているが、これら観光客の増加は、必ずしも中心部の賑わいには

結びついていない。中心市街地の歩行者通行量および年間商品販売額ともに、二十年前のおおむね半分に減少している。

そこで本市では、中心市街地の活性化には、中心部の観光都市機能を強化する必要があるとの理由で、水辺と一体となったまちづくりの視点から、石狩川と牛朱別川を中心に、隣接する常磐公園や美術館、公会堂、野外彫刻などの既存の文化芸術的な地域資源で囲まれた区域を「文化芸術ゾーン」として位置付け、その魅力を高めるとともに、これら区域と、中心部や他の観光資源を緑道や街路樹、さらに彫刻などを質の高い動線でネットワーク化し、市民や観光客が日常的に文化芸術に触れ合える場の創出を計画している。

この「文化芸術ゾーン」の中心に位置する常磐公園は、樹々の緑につつまれて彫刻が立ち並び、心豊かな文化を育む芸術の香り高い市民の杜として愛されている場所である。

さらに、石狩川と牛朱別川の合流点には、北海道遺

産にも登録されている旭川のシンボル「旭橋」が架橋されており、大雪山連峰を背景に、石狩川に架かる旭橋の姿は最も旭川らしい景色として、重要な観光資源となっている。

これら計画の実施については、国土交通省で新たに創設された「かわまちづくり」制度を活用する考えである。

本市の「かわまちづくり」では、石狩川築堤の緩傾斜化を図り、常磐公園と一体となった水辺利用を可能とするとともに、河川敷を文化芸術などに関わるイベント空間や来訪者や観光バス等の駐車スペースなどに活用できるよう整備するほか、河川敷へのアクセス道路など観光都市機能を高める空間として生まれ変わる。

観光都市機能を高める 河川空間をめざす

さらに、河川敷使用の特例措置により、地元商店会等が中心となって、河川敷でのオープンカフェの実施や、彫刻家と市民が共同で野外彫刻を制作し設置するなど、市民が文化芸術に触れ合える数多くのイベントの開催が可能となる。

このように、本市では貴重な地域資源であり、市民共通の公共財産である川の魅力を最大限に活用することが、まちづくりを進める上で非常に重要と考えている。

川には、人々の憩い・交流の場としての機能があり、都心のオアシスとして心の癒しの空間としての機能がある。今後も「川のまち旭川」の特性を活かし、豊かな自然の輝きと都市の調和を大切に、次世代に自信を持って引き継げる魅力的なまちづくりを進めて行きたいと考えている。



荒川を市民活動のフィールドに

―市民協働で多彩なイベントや環境教育―



福島市建設部河川課 河川企画係長

● 佐藤光憲

ボートの縁をつかんで固まってしまった子供たち、パドルを持ったまま漕ぎ出せない小学生たち。ゴムボートやカヌーの体験乗船で、よく見かける光景である。近ごろは、プールや海以外では水に足を入れることもない子供が増えている。

川はそんなにも遠い存在になってしまったのだろうか。

「ふるさとの川・福島」の原風景

磐梯朝日国立公園の高峰東吾妻山に源を発する一級河川荒川は、標高差約千五百メートルを一気に流れ落ちる暴れ川で、福島盆地に扇状地を形成しながら阿武隈川に注いでいる。古くから氾濫を繰り返しながらも福島盆地に多くの恵みを与えてきた。

西に吾妻連峰、東は阿武隈高地に抱かれた福島市は、古くは阿武隈川の舟運により、現在においても首都圏と東北圏、太平洋と日本海を結ぶ交通の要衝の地として発展を遂げてきた。荒川は、市街地のすぐ南で阿武隈川に合流していて、盆地中央に島のように佇む信夫山とともに中心市街地の

原風景を構成している。

沿川の downstream、中心市街地より二キロほど場所には八百メートルにわたる桜づつみ公園が整備されており、二百二十本のソメイヨシノが吾妻山の雪形「雪うさぎ」とともに春の荒川を彩っている。また、中流部には荒川資料室があり、通年で訪れる来訪者を迎えるながら見所の紹介をしている。

その他にも、土湯温泉、水林自然林、キャンプ場、四季の里、あづま総合運動公園、民家園等沿川には豊富な観光資源が多くあつて、荒川の魅力を高めている。

また、近年荒川の水は、国土交通省水質調査ラッキンク日本一に三度輝いており、平成二十年度に環境省が認定した「平成の名水百選」にも選ばれて、その清らかさをアピールしてきた。

「ウォーキング大会の開催、活発な市民活動」

平成九年、荒川は国土交通省（当時建設省）により「ふるさとの川整備事業」の認定を受けた。現在は、制度統合により「かわまちづくり支援制

度」で認定を受けている。来訪者の利便を図るための遊歩道の整備が進む中、ウォーキングブームの到来により、多くの市民が荒川を訪れるようになった。同時にウォーキング大会、クロスカントリーの大会などが度々開催され、にぎわいをみせている。

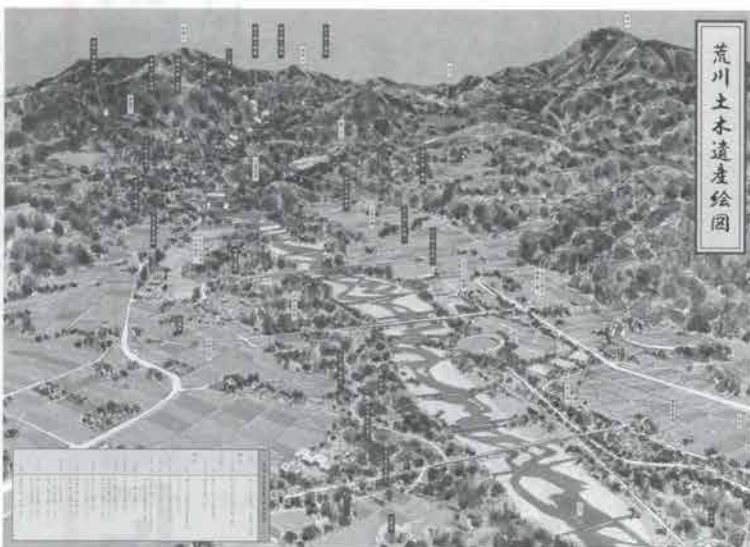
しかし、荒川で特筆すべきは「ふるさとの川・荒川づくり協議会」の存在である。協議会は、先に記したふるさとの川整備事業の認定を受けて平成十年に設立し、地元の住民はもとより企業・行政の職員、大学の教授などが集まって行政から独立して環境教育を中心に様々な活動が続けてい



荒川クリーンアップ大作戦の様子



砂防堰堤群のシンボル地蔵原堰堤



土木遺産の鳥瞰図

る。

以下、その活動の一部を紹介する。

- ①野草、水生生物、昆虫等の観察や調査をして、環境教育をする荒川大将塾（年五回）
- ②荒川の魅力を紹介する荒川探訪会（年三回）
- ③沿川の草刈り・ゴミ拾いを通じて環境美化を図る荒川クリーンアップ大作戦（年三回）
- ④荒川の魅力を市民に紹介する荒川パネル展
- ⑤講演会を実施して、多くの方とともに荒川を考える荒川大学

この他にも、鮭の稚魚放流や荒川で行われる種々のイベントの支援、協力をしている。これらの活動が実を結び、今では活動に多くの参加者が

応募しており、特にクリーンアップ大作戦には、毎回一千人にも及ぶ市民が参加している。これらの活動は、会員の会費と企業よりの支援のみで賄われていることも記しておきたい。

（歴史的資産としての砂防施設群

荒川の歴史を辿っていく際に、治水の歴史を抜きにはできない。氾濫と土石流の歴史であり、先人の苦労がしのばれる。現存する数多くの旧堰堤や水防林はその闘いの証となる。また、明治以降は数多くの砂防堰堤が整備されてきた。堰堤の整備により、中流部の土石流がほとんどなくなり、流域の住民は安心して生活できるようになった。

これら堰堤群の存在を再認識する機会となったのが、平成十九年の土木学会選奨土木遺産の認定である。認定以降さらに研究を進めることにより、現在では砂防堰堤十五基が国の登録有形文化財に登録されており、引き続き他の砂防堰堤、旧堰堤、水防林についても登録有形文化財及び登録記念物に申請すべく研究を続けている。

（川全体が博物館、流域資源は地域の財産

こうした活動をしているのが、「ふくしま荒川ミュージアム推進会議」である。荒川沿川をフィールドとして、そこに点在する歴史的な治水・砂防施設、地域の風習や文化、豊かな自然等の各種資源を地域の財産としてとらえ、野外博物館として流域資源の保存と活用を図るべく設立されたこの推進会議は、前述の市民団体や商工団体、行政が中心となって、平成二十年に設立した。

研究のほかに、沿川で催される各種イベントの推進会議の認定事業としてHPで紹介するなど、沿川住民の点の活動を面としてつなげる活動もしている。

福島市は近隣の三市と連携して「やさしさと自然の温もりふくしま観光圏」が認定を受けている。この事業には荒川周辺もメニューに組み込んでおり、さらなる回遊を目指して歩きやすい歩道空間の整備や案内板の設置を進めている。

これまで、市は協働で荒川周辺のまちづくりを進めるために、団体や人の育成に力を入れてきた。これまで培ってきた人・地域との関係をもとに、荒川を訪れる人々に居心地のいい空間を提供していきたいと考えている。

流域各地の「川の駅」が交流の場に

―地域のにぎわい創造へ官民連携広げる活動―

全国川の駅推進実行委員会代表世話人

● 小川信次

関東圏の利根川は、源流のみなみ町から前橋市、伊勢崎市、取手市を流れ、銚子で太平洋に注ぐ。江戸川は、野田市地区で利根川から分流し、杉戸町、春日部市、松戸市、東京都江戸川区を経て東京湾に注ぐ。

この江戸川流域の松戸市で、「川の駅」の設営、河川空間を利用した地域住民の交流の場となっている。かつて市の取り組み、「川の駅」とトイレを考えるトイレフォーラム開催など、多様な動きが始まっている。これらの動きを紹介する。

とかくこれまで、河川および周辺空間での複数市町村の活動は連携がなく、バラバラであった。ところが、国土計画局の地方の元気再生プロジェクト、河川局の「川の駅」等の河川交流拠点づくりに向けた取り組み等がある。有志市町村、有志住民リーダー、NPO等の連携の動きが生まれ、利根・江戸川という約二百キロの距離に及ぶ交流連携の核ができてきた。

その活動理念は、従来の治水、利水、環境という川管理の視点に限らず、危機管理（安全・安心）

をベースとしながら、教育、観光、経済活性化という複合視点をもって、かわまち空間を活用するという動きが出てきたのである。

（川の上・中・下流をつなぐ） 「川の駅」が交流の場に

「川の駅」とは、川の近くにある、もしくは川の活動に関係した施設で、川を通る人にトイレや休憩の場所を提供するとともに、来訪者が求める地域の情報を提供する機能を備え、人と人の出会いと交流を促進する空間施設である。また、「川の駅」を拠点にして、川の上・中・下流の駅同士が、協力・連携することを申し合わせて、流域の賑わいづくりを進めようとしているものである。

このような考えで、平成十九年度、二十年度に、江戸川流域で多数の実験的な「川の駅」が設置された。そして、江戸川の中心都市松戸市では、江戸川のゴルフ場（江戸川ゴルフ倶楽部）の経営者が、「川の駅」の趣旨を理解し、実験設置が行われた。また、堤防上の川の一里塚には、臨時的なリバーカフェを想定して「川の駅」が設置された。

その写真が左記である。江戸川上流の関宿城の「川の駅」も紹介する。

（地方の元気再生事業として） 「カッパ市」開催

カッパ市は、内閣府が二十年度に採択した「地方の元気再生事業」として、江戸川沿川で松戸市ほか春日部地区、流山地区、江戸川区の四カ所で行い組んだものである。

その目的は、江戸川流域六十キロメートルの河川空間を活用して、農業者、漁業者、コーヒー屋さん、カヌー・Eボート、自転車好きの人、主婦、子供たち等、多様な住民・事業者が交流・協力して、元気な地域をつくるというもの。

「カッパ市」と称したのは、川には不思議な「カッ



江戸川のゴルフ場の前の「川の駅」



関宿城博物館(野田市)での「川の駅」の設置



「パ」がいるということにかこつけて、Kで始まる
 ①川活用 ②環境問題 ③健康 ④教育 ⑤危機
 管理(防災) ⑥経済活性化 ⑦交流文化 ⑧婚活
 といった八つの活動に焦点を置こうという意図を
 もったもの、つまりK8(かっば)である。



松戸上流の杉戸町での飲食サービス(スーパー堤防上)



松戸市隣の流山市の「えど川お休み処」の野菜市

江戸川流域では、二十一年度も次の四カ所で
 カップ市が開催される。
 (1)十一月一日(日)／江戸川区・なぎさ公園
 川の丘…ままかっぱの会
 (2)十一月三日(祝・火)／松戸地区・樋野口

川の一里塚…松戸地区実行委員会
 (3)十一月八日(日)／流山地区・えど川お休
 み処…菜の花協議会
 (4)十一月十四日(土)／春日部地区・龍Q館
 ……すぎとSOHOクラブ、G-CANS、庄
 和商工会

「駅・トイレ」フォーラムも よりよい水辺の環境めざし

上記のような多様な活動があることから、ユ
 ニークなトイレフォーラムが、十月十七、十八の
 両日、松戸市で行われた。川とトイレは密接な関
 係があり、日本トイレ協会主催の「第二十五回全
 国トイレシンポジウム」に合わせ、同協会と松戸
 市、川の駅関係者等が協力して開催されたもので、
 多様な流域関係者が協力して、多面的に川とトイレ
 のことを考え、よりよい水辺環境の創造を図る
 のを狙いだ。

この中で、「川の駅」とトイレをめぐる講演の
 ほか、各種プレゼンテーションが行われた。プレ
 ゼンテーションの主な内容は、①各種の先進的ト
 イレの取り組み ②利根・江戸川での川下り常設
 コースづくりの動き報告 ③幸手・杉戸・吉川・
 江戸川区の中川の全域川下り報告 ④大阪の「川
 の駅はちけんや」の設置実験の報告 ⑤市民はう
 さい協定の申し合わせの提案 ⑥学校教育と地域
 との連携について学校長らと語る ⑦スポーツく
 じ資金を使った川沿いのクラブハウス設営案 ⑧
 流域の市町村長等が参加してのサミット懇談会—
 など。盛りだくさんだった。

これらの成果は、今後の江戸川共和国づくりに
 向けて大きな効果を発揮するだろう。



広大な河川敷は市民の憩いの場

―日本一の大河を活かした協働のまちづくり―



長岡市都市整備部公園緑地課公園整備係長

● 中川信行

「前より前へ！長岡」を合言葉に

長岡市は、新潟県のほぼ中央部に位置しており、市域は守門岳から日本海まで広がる八百四十・八八平方キロメートル、人口約二十八万人のまちである。

市の中央部には、日本一の大河・信濃川が悠々と貫流し、その両側には肥沃な越後平野が広がり、東西には東山連峰や西山丘陵地がそれぞれ連なっている。

古くは、戊辰戦争と長岡空襲の二度の戦禍に遭い、近年では、新潟県中越大地震などの二度の震災を乗り越え、また合併を乗り越え、「前より前へ！長岡」を合言葉に、市民と協働で新しいまちづくりを進めている。

また、米百俵のまち・長岡ならではの教育施策として、未来を担う子どもたちに夢と自信を持たせる「熱中！感動！夢づくり教育」、教員の指導力・資質を高める「教員サポート錬成塾」などは全国自治体の注目を集めている。

今年のNHK大河ドラマ「天地人」の主人公・

直江兼続は、長岡市ゆかりの名将である。戦乱の世に「義」と「愛」を貫いた兼続。この名将を支えた妻・お船の方は、市内の与板地域の出身であり、城下町と板の魅力を全国に発信するまちづくりを進めている。

「長岡名物の花火大会には八十万人の見物客が」

日本一の大河・信濃川は、母なる川であり、ふるさとの川である。私たちは、その信濃川から多くの恵みを受けてきた。その歴史は古く、約二万年前の旧石器時代から古墳時代に至るまでの人々が生活し、たくさんの方の遺跡が発掘され、中でも出土された火焔（かえん）土器は、信濃川水系が発祥の地とされている。

信濃川は暴れ川であり、人々は洪水と戦ってきた。その都度、治水を施すとともに、新田開発に全力を注いできた。その結果、有名ブランドの新潟米「こしひかり」を生み出し、豊かな伏流水は、おいしい酒を提供してくれる。

また、何と言っても長岡の名物は、広い河川敷



長岡花火の魂「正三尺玉とナイアガラ」

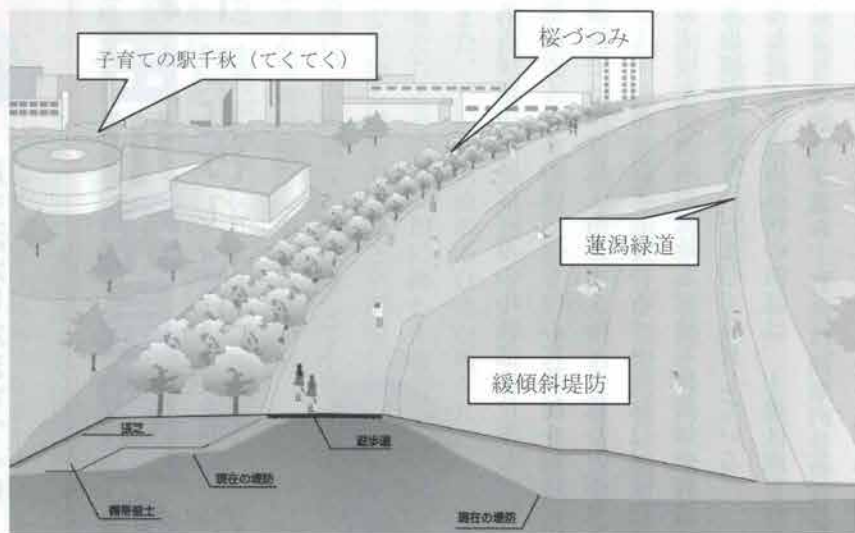
を十分に利用した「長岡まつり」大花火大会。毎年、二日間で八十万人以上の見物客で賑わう。二万発の花火、震災復興花火「フェニックス」、正三尺玉が有名である。平成二十年からは、大河ドラマ「天地人」の放送にちなんで「天地人花火」も話題となっている。

普段は、雄大なスケールを感じる信濃川の河川敷も、この日はばかりは多くの見物客で埋めつくされる。夏の夜空に「ドドン」と響きわたる花火の音に「ウォーッ」と湧き上がる大歓声が川の兩岸にこだまする。

「河川敷で各種スポーツ大会や多彩なプロジェクト開催」

千秋が原ふるさとの森は、信濃川左岸のほとりに位置し、ハイブ長岡（長岡産業交流会館）、長岡リリックホール、新潟県立近代美術館がある。施設内には、色とりどりの季節の花が咲きそろう花の広場や広々とした芝生がある緑の広場などがあり、春には約百七十団体の参加による「長岡市花いっぱいフェア」が開催され、二日間約五万人の来場者でにぎわっている。

蓮渥地区環境整備のイメージ



そして、冬の風物詩として、雪像やジャンボすべり台、雪合戦などのアトラクションが行われる「雪しかまつり」もこの会場がメインとなる。

近接して、長岡造形大学や長岡日赤病院、福祉の駅なども整備されており、文化、医療・福祉・健康のまちとして、近年、大きく発展してきた。

また、広大な河川敷は、市民の憩いの場、活動の場として広く親しまれている。日ごろは散歩やジョギング等に利用されている。兩岸には、運動公園やスポーツ広場も整備され、各種大会が繰り

広げられているほか、市民と協働による菜の花プロジェクトの場「花・はな広場」もここにある。

さらに、国土交通省信濃川河川事務所による信濃川左岸堤防の緩傾斜化（長岡大橋～大手大橋間「約千八百五十メートル」）に合わせて、堤防上では桜づつみの整備や散策路（蓮渥緑道）の整備を行っている。桜づつみは、長岡の桜の新名所として市民に親しまれ、散策路は、緑豊かな自然とのふれあいを創出し、信濃川の雄大さと四季折々の景色を味わうことができる良好な水辺空間を形成している。

（雪で閉ざされた公園内で
冬でも遊べる施設もオープン）

今年の五月五日こどもの日、堤内地に隣接している千秋が原南公園内に、全国初の屋根付き広場と子育て支援機能が一緒になった屋内型公園施設「子育ての駅 千秋（愛称てくてく）」がオープンした。雪国・長岡では、長い冬の間、公園は雪に閉ざされてしまうことから、「冬でも遊べる場所が欲しい」という声が市民から多く寄せられていた。これをきっかけに、市民との協働の中から生まれてきたのがこの施設である。保育士も常駐するこの施設には、市内のみならず、市外や県外からも訪れ、この九月で来館数は十万人を達成し、一日の平均来館者数も当初予想の約四倍となっている。

また、この公園内には、丸い形をした「えんえん（形の「円」、活動する場所の「園」、ふれあいの「縁」の合わせた意味）」があり、「鯨の噴水」「ふわふわ遊び」「お花畑」など、さまざまなテーマを持つ「えんえん」があるのが特徴である。



屋内型の公園施設「子育ての駅 千秋（てくてく）」

結びに、中心市街地では、平成二十三年の完成に向けて、屋根付き広場とアリーナ、市役所が一体となった全国初の市民協働型「シティホール（仮称）」をこの秋、着工する。設計者は、建築家の隈研吾氏。長岡が誇る市民と協働で進めるまちづくり、人づくりに、新たな魅力が加わる。皆さん、是非一度「前より前へ！」の長岡にお越し下さい。

「戸田川発見隊」の水辺環境づくり

— 一番汚れた川で様々な活動、交流広げる —



中川区役所区民生活部まちづくり推進室 主査
(安心・安全で快適なまちづくりの企画)

● 富安孝典

名古屋市中川区は、市の中西部に位置し、区の東部は古くからの商店街を中心に発展を続け、中川運河沿いには鉄工所・木工所・倉庫などが立ち並び工業地帯を形成している。中央部は、区役所始め主要な官公所が立地し、地下鉄高畑駅周辺は商業地域としてもめざましく成長している。

そして、庄内川以西の西部は、土地区画整理事業により宅地化が進み、各所に高層の公営住宅、マンション等が建設されている。また、名古屋環状二号線が南北に通じ、東西に走る東名阪自動車道、名古屋高速五号線、国道一号線など幹線道路と接続され、名古屋の西の玄関口として、さらなる発展が期待されている。

多くの河川に恵まれた中川区

中川区内には区名の由来となった中川運河を始め、庄内川・戸田川など七つの河川のほか、庄内用水、宮田用水などがあり、区内に河川が多く流れていることが特徴である。これら河川は、昔から流域に住む人々の暮らしと密接に関わりあいを

持ち、たびたび河川氾濫などがあった半面、流域に住む人々に大いなる恵みを与えてきた。

しかし、近年の工業化や人口増の影響などで区内河川の水質汚濁は深刻化し、中でも川の自流がないに等しく、下流域でのポンプ排水に頼っている戸田川においては水質の悪化度合いが深刻であり、名古屋市内で「最も汚れた川」とされている。

このような状況の中、こうした河川流域に生息する生物や草花を守り、河川を中川区の魅力の一つとして区民がより身近に感じ愛着を持つことで、区内外とのふれあいや交流を進めることが重要視されるようになった。そして平成十四年度に「特色ある区づくり事業」の一つとして、「川を生かしたまちづくり事業」が開始され、「水辺を生かした環境づくり」を進める「富田公園」が川沿いにある戸田川をメインに事業を行っている。

戸田川発見隊の具体的な取り組み

「川を生かしたまちづくり事業」の開始に伴い、平成十四年に戸田川流域住民を中心に設立された

「戸田川発見隊」は、川とのふれあい、魅力ポイントの探索、清掃・美化活動などの取り組みを実施し、名古屋市内で一番汚れているとされる「戸田川」に愛着を持ってもらえるよう、次のような取り組みを行っている。

(1) 戸田川流域の定期的な清掃活動

戸田川発見隊隊員による年数十回に及ぶ戸田川流域の清掃活動に加え、戸田川発見隊の企画で、地域住民の方々にも参加いただく戸田川の大清掃活動「戸田川をきれいにし隊」を毎年十一月に実施している。七回目となった平成二十年十一月の活動では、中川区内の清掃ボランティア団体や民間企業の協力も受け、一般参加者も含めて約二百人が参加した。また、こうした清掃活動が近隣に認知されるに伴い、河川流域に捨てられるゴミも少しずつではあるが減少傾向にある。

(2) 川の水質調査と水質改善実験

戸田川の水質と生物の生態を定期的に調査するとともに、汚濁原因などを追究している。また、木炭やEM菌などを用いた水質浄化手法についても勉強しており、特に、水中の臭気や汚



戸田川大清掃の様子

濁成分を吸着する効果をもつ木炭を用いた水質改善効果の検証を行っている。

(3) 河川周辺の景観づくり

土木事務所などの行政機関にも活動が認知されるに伴い、公園管理の一部を任せられるようになり、戸田川流域にある富田公園においては、戸田川の景観を良くするために花の種まきを行う「花いっぱい運動」を一般参加者を募って実施している。植えた種は戸田川発見隊メンバーによる日々水まき・草刈りのかきもあって、公園には多数の花が咲き誇り、近隣住民の憩いの場となっている。

特に、今年は立派に育った「アーティチョーク」が地元新聞紙にも取り上げられ、市内各所から大勢の見物人が訪れた。

(4) 近隣小学校との交流

戸田川近隣の小学校から依頼を受け、学校の教室で戸田川の歴史と現状及び環境問題に関する講義や川に関心を持ってもらうために児童自身による戸田川の水質調査実験を行うといった小学校への出前授業の講師を務めている。

また、戸田川上流部の自然が残された所で、子どもたちとその親に川に棲む生物について知ることと生物多様性の重要さを理解してもらうことを意図に、漁獲網などを使用して小魚などの川に生息する生物の観察会を行っている。

(5) 生涯学習センターでの講座講師

生涯学習センターの公開講座において、戸田川発見隊のメンバーが「戸田川かわい」について、現地学習を主とした方法で、戸田川に生息する生物、周辺に咲く花及び水質調査や清掃活動など、戸田川をきれいにする取り組み等をテーマにした

講座の講師を務めている。

(6) その他の活動

上記の活動に加えて、戸田川発見隊の活動内容をまとめたチラシを定期的に発行することにより、戸田川発見隊の活動状況や戸田川の生物紹介などを行って戸田川の魅力PRに努めている。

さらに、来年名古屋で開催される生物多様性条約第十回締約国会議(COP10)を視野に、戸田川を含めた河川環境を保全することの重要性を訴えるとともに、市民に生物多様性の保全に対する意識を向上させることを目的に、「中川区区民まつり」や「環境デー」などや中央行事「などへブラスを出展し、活動内容のPRをはじめ、広く環境保全に関する啓発活動を行っている。

周辺住民の参加拡大などが課題

戸田川発見隊は設立して七年経過する。隊の活動も行政機関や周辺住民に認知されるようになってきており、現在行っている活動、特に清掃活動や河川周辺の景観づくりは一般参加者も増加傾向にあり、一定の成果を上げている。

一方で、隊の目的の一つである河川浄化については、現在のところ特段の活路を見出せない状況にある。木炭



環境デーなごやブース出展



小学校出前授業

の使用などによる水質浄化の手法について研究しているものの、今後、河川浄化を本格的に進めていくためには、川の上下流域の関係団体などのほか、河川浄化などに取り組む他団体との交流・連携も視野に入れた活動の拡大が必要である。また、これまでの活動で得られた経験を生かして、戸田川以外の河川にも目を向けた事業展開が重要である。

そこで今後は、活動の拡大を視野に、隊の活動に関心を持って入隊してくれる人を増やすため、さらなる活動PRの充実や河川周辺の景観づくりなどを行う際に、より多くの周辺住民に参加してもらう方法を検討していきたい。また、企業への協力依頼を企画するなど、財政的な充実を図る方策及び戸田川以外の中川区内の河川への活動展開についてもその手法を含めて検討する予定だ。

勢田川の舟運の再生をめざして

「歴史の宝庫」を再評価、まちづくりの柱に―



NPO法人伊勢河崎まちづくり理事長 ● 高橋 徹

（水運で伊勢のまち発展を支えてきた勢田川）

お伊勢さんのまちとして、近世より多くの参拝客を受け入れてきた伊勢には、三の特色ある川がある。『清流日本一』を誇る宮川、伊勢神宮・内宮神域を流れる五十鈴川、そしてかつて水運により伊勢のまちを支えてきた勢田川である。

勢田川は小河川ではあるが、伊勢の中心部に位置し、水運で中流部の河崎を問屋街として発展させるとともに、河口の大湊はかつて伊勢湾内の物流拠点、造船の拠点でもあった。

神社港は荷揚げ、風待ちの港として栄え、町並みにはかつての港町風情を伝えている。伊勢三座と言われる一色、通地区の能楽は勢田川沿いであり、今も地区の人たちによって演じられ、四百五十年の歴史が受け継がれている。

海路よりの船参宮の人たちの上陸地でにぎわった二軒茶屋には、今も天正年間創業の餅店があり、往時を偲ぶことができる。

かつて伊勢の経済、歴史、文化面において重要

な河川だったが、戦後、水運としての役割を終え、人々の川とのつきあいがなくなり、また伊勢の市街地の大半の排水を引き受け、川は汚れ、悪臭が鼻を突き、いつからか『お荷物扱い』を受けてきた川だった。

（町並み保存運動は対立から協働へ）

勢田川沿いの歴史的価値を見直すきっかけは、昭和四十九年の集中豪雨（七夕災害）

の災害対策、勢田川改修計画（二百四十六戸もの立退きを含む）に対する異議申し立てを契機とした、伊勢河崎の歴史と文化を育てる会のまちなみ保存運動だった。

活動を通して河崎地区、勢田川の歴史的文化的価値を再発見していくことになった。残念ながら保存運動の甲斐なく川沿いの歴史景観は河川改修により壊されたが、会

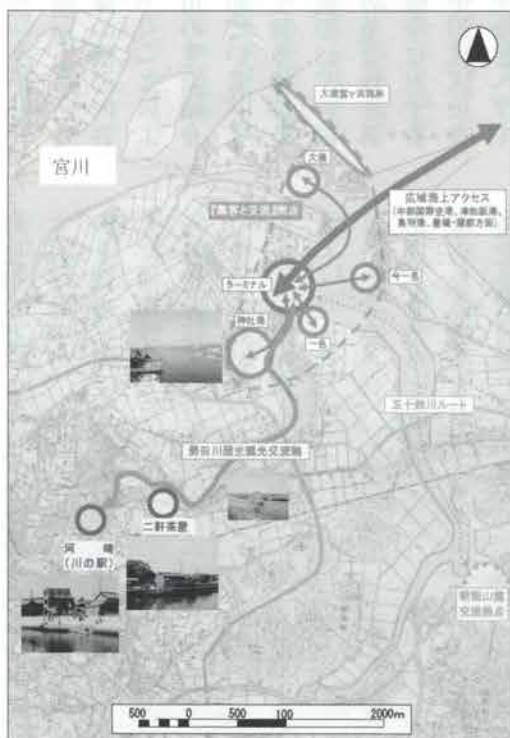
は町並み保存活動を地道に継続し

ていった。

活動の大きな転機は、河崎の代表的な酒問屋の保存再生に向け、行政との紆余曲折の協議を経て用地買収、建物整備を行政が、管理運営を民間のまちづくり組織がそれぞれ担うことが合意されたことだった。

行政との対立から協働のまちづくりへと舵を切り、平成十一年にまちづくり活動を広げるため、NPO法人「伊勢河崎まちづくり衆」として新たなスタートを切った。

旧酒問屋は伊勢河崎商人館（平成十四年八月開館）として生まれ変わり、まちづくり衆が管理運営を担い河崎のまちづくり拠点となっている。まちづくり衆の活動は、歴史的町並みや伝統的建造物を活かしたまちづくりを核に、様々な展開をしているが、勢田川の舟運を活かす川湊再生のまちづくりも大きな柱にしている。



勢田川の観光交流軸



伊勢河崎商人館前のにぎわい



河崎川の駅 花木園ボランティアグループの活動

（勢田川を「歴史観光交流軸」に位置付け、取り組み前進）

河崎の町並み保存運動を契機に、勢田川を活かしたまちづくりは色々な人々によって取り組まれてきた。昭和六十年ごろから水環境に関心を持った市民による勢田川の浄化運動は、今では毎年、七夕に近い日曜日に流域の市民を中心に「勢田川七夕大そうじ」として定着している。

また二軒茶屋地区では、伊勢のれん会による船参宮の歴史を生かす「どんどこ市」（現在どんどこ祭り）を毎年春に開催し、木造和船どんどこ丸の建造と活用、船参宮でゆかりの常滑市民との交流など、今年で二十五回を数えている。

勢田川再生の取り組みが大きく前進したのは、

都市マスタープラン（平成九年）において勢田川を歴史観光交流軸と位置付け、宇治山田港交流拠点と河崎歴史文化交流拠点（伊勢河崎商人館）を結ぶ動脈としてのプランを打ち出したことと、中部国際空港の開港である。

伊勢湾を通して、かつて多くの物資や船参宮客を受入れてきた海の街道が見直され、大湊と河崎を結ぶ勢田川の価値に気づいたのである。

NPO法人「神社みなどまち再生グループ」とともに、日本財団や伊勢市の支援を受け、伊勢船型木造和船の技術伝承事業として木造船の建造と記録保存の事業を行い、建造した船を運航活用するために、河崎、二軒茶屋、神社港、大湊に海の駅・川の駅を設け舟運を生かした川まちづくりの拠点

とし、「みずき」（伊勢市出身、マラソンの金メダリスト野口みずきさんにちなむ）と名づけられた復元和船を、法人「神社みなどまち再生グループ」が定期運航（土日一回）している。まだ定期乗船者は少ないが、様々な事業でみずきは活躍している。

伊勢河崎まちづくり衆が事務局となり、流域のNPO、市民によるNPO伊勢「海の駅・川の駅」運営会議を設立し、河口の大湊から神社、一色、二軒茶屋、河崎までの緩やかな流域連携を核に、「勢田川の歴史文化に触れられる新たな魅力ある交歓の場として再生しよう」と、地域資源の掘り起こしやマップづくり、交流モデル事業（船参宮春のにぎわい等）やマリン学習など、国の観光交流モデル事業などを活用して、観光交流事業を行ってきた。

（にぎわいある河川空間創出へ 景観フォーラムなども開催）

平成二十一年に宮川水系として、国の川まちづくり事業「にぎわいのある河畔空間の創出」モデル地区に選定されたのを機に、行政とともに流域の歴史文化を核に親しみのある景観整備を進め、川湊としての機能を拡充し、舟運を活かした人々が交歓するステージとして勢田川再生を目指し、勢田川景観フォーラムの開催、勢田川ゴミバトルなど行っている。

平成二十一年十一月三日には内宮宇治橋の渡り初め式が挙行され、四年後の平成二十五年には第六十二回伊勢神宮の式年遷宮が行われる。遷宮を目標に伊勢湾から海の玄関口宇治山田港を経て、勢田川を木造和船「みずき」で参宮する人々を多く迎えられるよう、市民とともに川まちづくりに取り組んでいきたいと考えている。

道頓堀川の水辺空間利用を推進

—「とんぼりリバーウォーク」での賑わい創出—

道頓堀川は、大阪の都心部に残された貴重な水辺空間であり、都心の再生及び大阪の活性化を目指す「水の都大阪再生構想」のリーディングプロジェクトとして、親水性の高い川沿いの遊歩道や船着場の整備を実施している。また、ハード整備とあわせて、国の通達等に基づく河川敷地利用の規制緩和により水辺でのイベント実施等の多目的利用を促進するなど、利用推進に向けた沿川地元・事業者等との協働も積極的に取り組んできている。

（都心に残された貴重な水辺空間

道頓堀川は、大阪を代表する繁華街「ミナミ」の中心部を東西に貫く延長二・七キロ、河川幅三十～五十メートルの一級河川であり、都心部に残された貴重な水辺空間である。

道頓堀川水辺整備事業は、道頓堀川、東横堀川の両水門の建設及び道頓堀川の両岸において、水面近くを散策することのできる遊歩道（愛称「とんぼりリバーウォーク」）や船着場を整備し、沿川

の建物から遊歩道へ直接出られる川とまちが一体となった回遊性ある空間を形成することにより、水辺の潤いと賑わいと活力のある水辺空間を創出し、都市魅力の向上に寄与することを目指している。

大阪市建設局下水道河川部河川担当

道頓堀川水辺整備事業位置図



「水の都・大阪」再生への動き

平成十三年度に政府の都市再生本部において、「水の都・大阪再生」が「二十一世紀型都市再生プロジェクト」（第三次決定）に決定された。平成十四年度にはこの都市再生プロジェクトの決定を受け、国、大阪府、大阪市、経済界等からなる「水の都大阪再生協議会」が設立され、この協議会において「水の都大阪再生構想」が策定された。この構想では、周辺に豊富な水辺の集客・歴史・文化資源を有し、道頓堀川を含め都心を「ロの字」に取りまく河川を「水の回廊」と位置づけ、他の都市にはないオンリーワンの魅力として、これを活かしたまちづくりを公民協働して推進することとしている。

水辺整備の概要

遊歩道の断面構成としては、まちから川への動線を、橋からだけではなく沿川の各所からアプローチできるような配慮し、沿川建物からの出入りの容易さと水面近くを歩行できる親水性を考慮し、上下二段構造とした。また上下段の遊歩道の段差には、階段とスロープを設け、まちから川への円滑な誘導を図った。

現在、本市のメインストリートである御堂筋を挟む東西約一・〇キロの区間（湊町～日本橋間）について、平成二十二年度の遊歩道完成を目指して重点的に事業進捗を図っているところである。

また、遊歩道に併設して湊町、太左衛門橋、日本橋の三カ所の公共船着場を整備、供用しており、大阪府及び民間の船着場とあわせ、水の回廊にお



整備後の道頓堀川遊歩道（戎橋～太左衛門橋間）



道頓堀川水辺協議会の様子

ける水上交通ネットワークの充実を図っている。

（河川敷地占用許可準則における特例措置について）

平成十六年三月に、社会実験として一定の条件の下、河川敷地をイベントやオープンカフェ等に利用できることを認めた「都市及び地域の再生等のために利用する施設に係る河川敷地占用許可準則の特例措置について」（平成十六年三月二十三日付 国土交通事務次官通達）等の通達が出された。

道頓堀川については、平成十六年十二月に完成した戎橋～太左衛門橋間遊歩道（延長約百七十メートル）において、特例措置の適用区間としての指定を受け、順次、完成した区間から河川敷地の多目的利用に取り組んでいる。

社会実験を実施するにあたり、地元関係者との意見調整を図り、河川敷地の公平かつ適正な利用を確保するため、学識経験者、沿川地元代表、大阪市で構成する「道頓堀川水辺協議会」を設置し、河川敷地における利用内容とそのルールに関する意見調整を行い、合意形成が図られた内容から順

次、河川敷地利用の拡大を図っている。

（川とまちとの一体的なまちづくり）

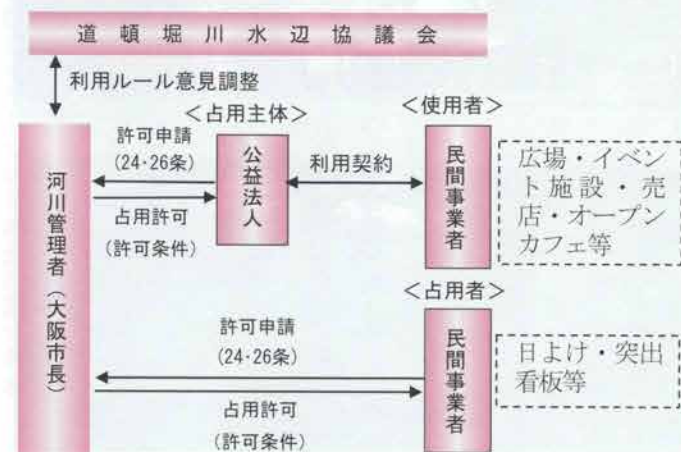
平成十六年度はイベント実施に向けてのルールを作成し、イベントの本格実施は平成十七年六月からとなった。またイベント実施に伴うバナー、提灯、横断幕等の設置や露店等の物販施設についても設置可能としており、これまで、随時水辺協議会において利用ルールの意見調整を図りながら、地域の伝統行事、販売促進イベント等、多様なイベントが実施されてきた。

遊歩道及び水面を使用するイベントの件数については、年々増加傾向にあり、近年では年間約二十件（約八十日）実施されている。

また、遊歩道における歩行者通行量（十二時間）は、平成二十年度は休日平均約九千五百人／日であり、平成十六年度の約二・四倍になるなど、一定の集客・賑わい創出効果が見られている。

また、平成十六年度に供用開始した太左衛門橋船着場の年間利用回数をみると、平成十七年度で約千百回であったものが、平成二十年度には約五千六百回とほぼ五倍に達しており、舟運による河川利用も着実に増加してきている。さらには、水辺遊歩道の活性化に伴い、沿川建物の間口が川側に向き、戎橋から太左衛門橋間の沿川建物三十六軒のうち平成十六年度には一軒であったが、平成二十一年九月末現在では十五軒と、徐々にではあるが川とまちが一体となった賑わいづくりが促進されている。

社会実験の枠組み



河川敷地の多目的利用の推進

これまで多様なイベントを実施してきたが、今後、未実施である定常的な広告やオープンカフェなど収益性の高い社会実験項目の利用ルールを作成し、実施することにより、施設利用料による運営収益の活用の可能性や高度な維持管理のあり方についても検討していきたいと考えている。

なお、イベントスケジュール、利用ルールやイベントの様子をまとめた映像コンテンツ等が「とんぼりリバーウォーク」のホームページに掲載されているので、是非ご覧になっていただき、一度とんぼりリバーウォークへお越しください。

（とんぼりリバーウォーク HP <http://www.tonbori.jp/>）

「水の都ひろしま」の社会実験

「水辺のにぎわい創出へオープンカフェ」



広島市都市活性化局 観光交流部
交流課水の都担当主幹

● 高野正徳

太田川河口のデルタに形成された広島市は、瀬戸内海に面し都心部を六本の川が流れ、また太田川中流域は環境省の「名水百選」にも選ばれ、都市の河川としては良好な水質を維持するなど、豊かな水辺に恵まれている。

こうした「水の都」の特性を生かしたまちづくりを進めようと、平成二年三月に国・県・市が協力して「水の都整備構想」を策定し、親水護岸や河岸緑地などの整備に取り組んできた。

その後、構想策定から十余年が経過し、都心部を中心に美しい水辺の形成が進んできた中で、市民を含めた多様な主体による水辺の利活用の促進に取り組むことが重要になってきた。

そこで、新たな取り組みの「よりどころ」として、平成十五年一月に市民と国・県・市が協働で、ソフト面の取り組みを主体とした「水の都ひろしま」構想を策定した。

4つのモデル地区で 重点的な取り組み

構想では「水辺などにおける都市の楽しみ方の

創出」「都市観光の主要な舞台づくり」「水の都ひろしまにふさわしい個性と魅力ある風景づくり」をめざし、「水の都ひろしま」実現のための行動指針として二十の基本方針を掲げるとともに、実験的な取り組みの推進と市民・企業・行政の協働を基本に、四つのモデル地区を設定し重点的に取り組むことにしている。

推進体制としては、市民、経済・観光関係団体、学識経験者と国・県・市で構成する「水の都ひろしま推進協議会」が推進母体となり、取り組み方針の決定や社会実験の枠組みの検討などを行い、市民・企業等と協働しながら推進している。

平成十四年七月に、広島市の「水の都の再生」の取り組みが国の都市再生プロジェクトに選定されたのに続き、平成十六年三月には、国土交通省河川局長から「河川利用の特例措置を適用する区域」として「京橋川右岸地区」等が指定された。

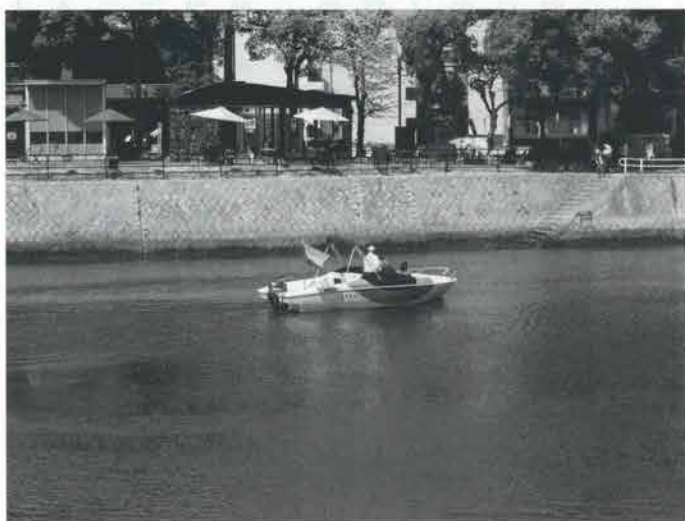
これらを受けて、民間の創意工夫を生かして水辺のにぎわいの創出をめざす社会実験として、平成十六年七月に京橋川沿いの二つのホテルが、隣

接する河岸緑地において「水辺のオープンカフェ」の営業を開始した。さらに、平成十七年十月には、河川空間に民間事業者が常設店舗（建築物）を設置した全国初の事例となるオープンカフェ「京橋リバーウイン」四店舗が公募により開業した。

オープンカフェ開業の 効果と今後の課題

「京橋リバーウイン」の設置計画の発表当初は屋台のイメージが強く、騒音や風紀の悪化等を懸念する一部住民から根強い反対を受けた。このため、オープンカフェ設置エリアの縮小、営業時間の短縮、出店者の営業マナー評価の仕組み導入などを行った。

その結果、開業後は目立った苦情もなく、開業前には放置自転車占拠し、夜は暗く人通りが途



船着場の遺構である雁木と「雁木水上タクシー」



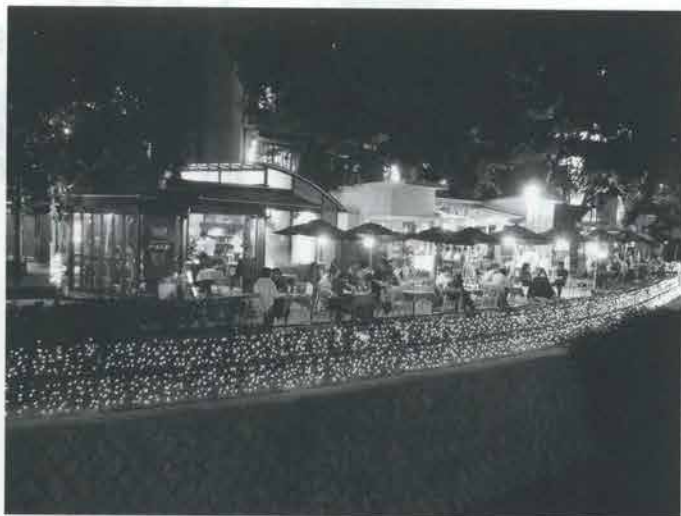
京橋川のオープンカフェ

絶える空間であった河岸緑地が夜も明るくなり、歩行者が増え安心して歩ける空間となった。

また、地元の町内会や学校の学生、まちづくり団体などとの連携により、地域の祭りやまちづくりイベントの場としても活用されており、市民活動を誘発する効果もみられた。

一方で事業を継続していくためには、様々な課題が浮かび上がってきた。最大の課題は、利用者が天候や気温に大きく影響されることである。

この問題への対応として、当初はオープンカフェならではの開放性を重視し、雨除け、風除けは簡易なものしか認めていなかったが、気密性を高め店舗内の快適な環境を確保するため、構造を仮設建築物とすることを認めることにした結果、二店舗で改修が行われ、来店者数の増加につな



京橋川オープンカフェ夜景

がっている。こうした公共空間の適正管理と民間の事業性確保の両立を図るため、出店条件など仕組みの見直しを随時行っている。

〔平和記念公園の隣接地では「水辺のコンサート」開催〕

現在、京橋川右岸地区は七店舗が並ぶ「オープンカフェ通り」となったが、市民や観光客によく知られているとは言えず、河岸緑地自体の魅力も十分ではない。

そこで、通りとしてのさらなる魅力や知名度の向上をめざし、全店舗が協力したスタンブラリーを今秋初めて実施するとともに、花壇等の設置による洋風ガーデン風の修景整備や周辺地区を対象に新規の店舗設置等を検討中である。

この地区には階段状の船着場の遺構である雁木

が数多く残っており、これらを利用した民間の水上演習も活動していることから、今後連携を深めたいと考えている。

このほかの取り組みとして、平和記念公園に隣接する水辺では、水辺にふさわしい文化やにぎわいを創り出すため、市民団体が企画運営する「水辺のコンサート」を春と秋の毎週末に開催している。また、市民による水辺の公共空間の活用を促進するため、「水辺の市民活動促進助成事業」により活動費を助成しており、これまでに六十の事業が助成を受けて行われている。

〔市民、河川管理者らと協働でさらに社会実験を重ねる〕

このように、広島は「水の都」の資質に恵まれ、市民等の活動も活発に行われているが、全国的には知名度が不足しているのが課題である。

このため、「水の都ひろしま」のイメージの強化をめざし、先述のオープンカフェ通りの取り組みのほか、旧広島市民球場に近接し歴史性も取り入れた美しい護岸のデザインが特徴的な基町環境護岸を「水の都ひろしま」のシンボリックな空間として整備・活用するため、水辺にレストラン等を設置することを検討している。

水辺の活用を進めるために実験的に取り組む中では、先例がないことから大小様々な課題にぶつかるが、公共空間の適正管理とのバランスをとりながら、一つひとつ解決を図るとともに、魅力向上のための新たな展開に取り組むため、今後も市民や河川管理者等の協力を得て、さらに実験的な取り組みを重ねながら、世界に誇れる「水の都ひろしま」づくりを進めていきたい。



市民とともに水辺の魅力高める

「心おどる水都・とくしま」の独自作戦―



徳島市企画政策局企画調整課

● 川口博史

徳島市は、市の北部を流れる四国一の大河・吉野川とその支流が育てた三角州に発達した、四国東部に位置する徳島県の県庁所在地である。

東部は紀伊水道に臨み、南部は山々の緑を背にした自然豊かな都市で、まちの象徴ともいえるべき眉山、城山が市の中心部にあるほか、吉野川をはじめとする大小あわせて百三十八もの河川が市内を流れている。

今から約四百二十年前、阿波に入国した蜂須賀家政が、この水に囲まれた地の利を活かして徳島城を築城し、城下町を建設したが、その名残として、市内には、福島、寺島、出来島など島の名が多く残されている。

かつては、川を利用して藍玉の積み出しなど物資の運搬も行われており、豊かな伏流水を使って、染色（藍染）をはじめ、醸造、織物などが盛んに行われ、その伝統は今もなお受け継がれている。

（中心地「ひょうたん島」で水と緑のネットワーク構想

このように徳島市は、水との歴史的なかわり

が非常に深く、他都市に類をみない水とともに発展してきたまちである。特に、中心市街地を貫流する新町川と助任川に囲まれた「ひょうたん島」と呼ばれる地域は、現在においても「水都・とくしま」としてのアイデンティティの形成に大きな役割を果たしている。

この「ひょうたん島」というのは正式な地名ではなく、両河川に囲まれた地域が上空から見るとひょうたんの形に見えること、また、かつてこの地区に「瓢箪島」という地名が存在していたことから、市民や観光客に「ひょうたん島」の愛称で親しまれているものである。

本市では、このひょうたん島を重点整備地域として水を生かしたまちづくりに取り組んでいるが、これまでそれをリードしてきたのが、平成四年三月に策定した「ひょうたん島水と緑のネットワーク構想」である。

この構想は、ひょうたん島を八つのゾーンに分け、ゾーンごとの自然的・歴史的特徴を活かした整備方針を立てることで、島全体の整備にストー

リー性を持たせるとともに、遊歩道の整備や周遊船の運航により、島の周りを回遊することができるようになるものである。

現在、計画されていた事業については、そのほとんどが完了し、ひょうたん島を取り巻く水と緑の魅力は大きく向上した。

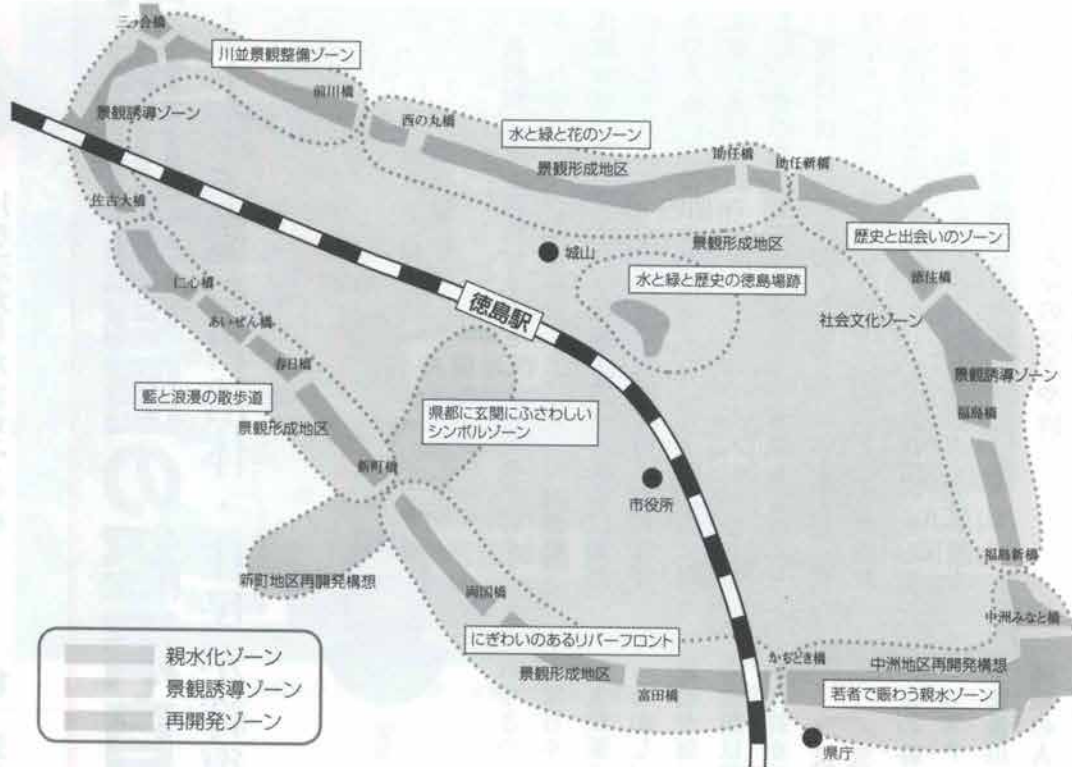
今では、ひょうたん島の周囲を取り囲むように親水公園や遊歩道が整備され、陸上ではウォーキングを、水上ではクルージングを楽しめるようになっており、特にNPO法人が運航しているひょうたん島周遊船は、年間の乗船者数が三万人を超えるなど、「水都・とくしま」を代表する、都市型の観光資源として大きな成長を遂げている。

（LEDの光の要素を加え、他都市にない特色

ただし、水と緑が豊かであることは、水都と冠する上での大前提であるものの、全国には水都と呼ばれる都市が数多く存在しており、水と緑が豊かであるというだけで、激化する都市間競争に打ち勝つことは難しいと考えられる。

そこで、現在、本市では、これまで整備してきたひょうたん島の水の魅力に、LED（発光ダイオード）の「光」の要素を加えることで、他の水都にはない、新たな特色を持つ水都の創造に取り組んでいる。

本市がLEDに着目したのは、世界的なLEDの先進地として、徳島にはLEDの開発・応用を行う数多くの製品製造企業や、学術的に蓄積のある大学等の研究機関が立地していることから、他都市と比べても圧倒的な優位性を持っていると考えたからである。



ひょうたん島水と緑のネットワーク構想

このLEDを活用して、平成十九年度より、ひょうたん島の橋や公園の景観整備に取り組んでいるほか、平成二十一年度には「ひょうたん島光の水のネットワーク構想（仮称）」の策定、平成二十二年四月には、LEDを用いたアート作品で街を彩る「LEDアートフェスティバル」の開催に取

り組むなど、「徳島＝LED」というイメージを全国に発信することで、水辺の魅力アップと産業の集積を同時に達成していくことを目指している。

（悪臭の川を市民らが浄化、 今や寒中水泳大会も）

このように本市では、ひょうたん島を核とする水辺の魅力づくりに取り組んでいるが、こうしたまちづくりが行政のみでなく、NPO法人をはじめとする市民自らの手によって進められているところに、本市の大きな特長がある。

かつて、ひょうたん島周辺を流れる河川には無数のごみが浮遊・散乱し、悪臭を放っていたが、行政による水質浄化の取り組みに加え、NPO法人を中心とする市民自らの地道な清掃活動により、市民が川へゴミを投棄するなどの行為も少なくなり、現在では魚釣りや寒中水泳大会ができるほどになった。

川沿いの店の顔は川側に向けられ、中心商店街が主体となって約三百軒のボードウォークも整備されているほか、NPO法人や民間企業などにより、様々な水辺のイベントや屋台・ミニショップの出店などが行われている。

（水の魅力を活かした まちづくり政策に力点）

こうした市民の想いを一つにし、それぞれの活動をさらに発展させていくため、本市では、平成十九年に策定した第四次徳島市総合計画において、目指すまちの将来像を「心おどる水都・とくしま」と定め、本市の最大の特長である水の魅力を生かしたまちづくりに市民とともに取り組んでいくことを掲げた。

今後も、この「心おどる水都・とくしま」を合言葉に、市民のみならず、本市を訪れる人々が心から幸せを実感できる、心がおどるような水都を市民とともに創造していきたいと考えている。



ひょうたん島周遊船



筑後川流域圏の経済自立めざす

―上・下流の自治体・住民が絆復活へ連携―



筑後川流域連携倶楽部 理事長 ● 駄田井 正

筑後川は九重連山を水源として、筑後平野を下り、有明海に注ぐ全長百四十三キロメートル（幹川経路）、流域面積は熊本・大分・福岡・佐賀の四県にまたがり二千八百六十平方キロメートル、流域人口は約百九万人である。筑後川の水は流域外にも及び、特に福岡県の人口の約六〇％、二百九十万人の喉をうるおし、その農業生産額の四五％を灌漑している。

筑後川は「筑紫次郎」と称せられ、板東太郎（利根川）、四国三郎（吉野川）と並んで日本の代表的河川である。その理由として、暴れ川であることが挙げられるが、人との関わりが古来深いことも理由の一つであると思われる。

（上・下流の人々の交流や絆をどう復活させるか）

筑後川の上流は森林地帯であり、杉、檜の植林が盛んである。筑後川がそそぐ「宝の海」有明海は、干満の差が六メートルあり、現在でも河川から二十三キロメートルにある筑後大堰まで海水が遡上する。

上流の木材は伐採されて、筏に組まれ下流に運ばれ、舟・家屋・家具などに加工され広く利用さ

れてきた。最下流の大川市は今でも家具生産としては日本一を誇っている。筑後川は物資や人を運ぶ大動脈であった。

しかし、鉄道や道路網の発達や、そしてダム建設や堰の改修で船が通れなくなったことで、その役割は終え、それとともに上・下流の人々の交流や絆が途絶えるようになった。

（筑後川フェスティバルと筑後川流域連携倶楽部）

この絆を復活しようと始まったのが、筑後川フェスティバルである。

筑後川フェスティバルは、今から二十三年前、流域の人的な絆を深めてネットワークを形成し、流域圏の様々な問題を共通のものとしてとらえようと大川市で始まった。その後、流域の各地を持ち回り、今年は福岡市で開催される。この地で開催されるのは、福岡都市圏も筑後川の恩恵を多大に受けているからである。

一方、久留米大学の産業経済研究所では、筑後川流域の総合研究に取り組んできた。このプロ

ジェクトスタッフが、地域調査や公開研究会の場で筑後川フェスティバルの実行メンバーと交流することになる。

その中で、筑後川流域の交流を恒常化し、連携を強化するための組織として「筑後川流域連携倶楽部」を結成することとなった。一九九六年六月にNPO法人の認証を得て、今年十周年を迎えた。筑後川流域連携倶楽部はその成立の経緯からして、単一の組織というよりは、筑後川流域で環境保全や地域づくりに取り組むネットワークである。それぞれが実施したいことを提言し、この指とまれ、式に仲間を集めてチームをつくり、夢の実現を目指している。

（流域の連携に欠かせない「筑後川新聞」を発行）

このようなネットワークが機能するには、広く情報が共有されなければならない。この点、筑後川流域は四県にまたがっていて、既存のメディアでは不十分なため、「筑後川新聞」を発行している。またホームページの充実にも力を注いでいる。

筑後川流域連携倶楽部の活動基本方針は、筑後川に学び、筑後川で遊び、筑後川で稼ぐである。これらの方針に対応して、三つの基本的プロジェクト「筑後川まるごと博物館」「筑後川まるごとリバーパーク」「筑後川まるごとリバーマーケット」を打ち出している。

筑後川まるごと博物館は、筑後川流域に点在するすばらしい自然や歴史的遺跡、文化的遺産はもちろんのこと、地域の産業や住民の生活文化など、有形・無形のものを対象にして、それらが存在する場所で保存・継承しながら学びの対象とするも



流域はひとつの文化圏、4県にまたがる流域人口は109万人

のである。

いわば、筑後川流域全体を博物館とみたため、建物はないが展示される資料と学芸員、それに学芸員が活動するフィールドがあり、博物館に必要である三つの要素が備わっている。

それに加えて、これからの博物館では、四つめの要素として市民の積極的なかわりが必要とさ

（）筑後川まるごとリバーパーク構想

れるが、筑後川まるごと博物館では、成立の経緯からして市民が積極的に参加している。

筑後川流域は、すばらしい自然、温泉、歴史的遺跡など観光資源に恵まれている。これらの豊富な資源もバラバラで画一的な方法で観光につなげ



上流から中流、下流には個性豊かな文化が息づく

ようとしても効果は薄く、かつ資源が浪費され持続性を失ってしまう。

筑後川まるごとリバーパークの構想では、流域全体を「川と水」を主題として、十一のゾーンに分けてそれぞれの特色を浮き出し、相互に連携・ネットワークして魅力を高めようとしている。

この構想を実現すべく、流域内の観光協会や活動グループ、それに自治体など呼びかけ、推進協議会を結成している。これらの協力のもとで、月一回のペースでモニターツアーを実施している。

筑後川まるごとリバーパークは、筑後川流域圏の経済的自立を促すことを目的としている。現在のところ、地産地消を促進するための地域通貨「カップマネー」の発行と、クレジット会社と提携して「筑後川リバーカード」の発行を行っているが、将来的には「筑後川ブランド」の確立をめざしたい。

「かわまちづくり」支援制度の創設

—にぎわいのある河畔空間の創出—



国土交通省河川局 河川環境課流域治水室 課長補佐

● 古市秀徳

はじめに

太古の時代から、我が国では、河川は人々の生活と密接に関わり、地域の風土・文化を育んできた。しかし、戦後、高度経済成長期には、都市域を中心に機能性や安全性を優先した無機質なコンクリート護岸や高い堤防が整備され、また水質の急激な悪化により、人々・まちは魅力を失った川から背を向けてしまった。

しかし、高度成長期も後半に入ってくると、河川が本質的に果たしてきた、流域における自然、地域における風土・文化を形づくる重要な役割が、再び求められるようになってきた。

社会ニーズの高まりを受けて、河川審議会において「川の三六五日」を意識しつつ河川行政を展開することが重要である旨の答申がなされ、国土交通省では、自然豊かで、貴重なオープンスペー

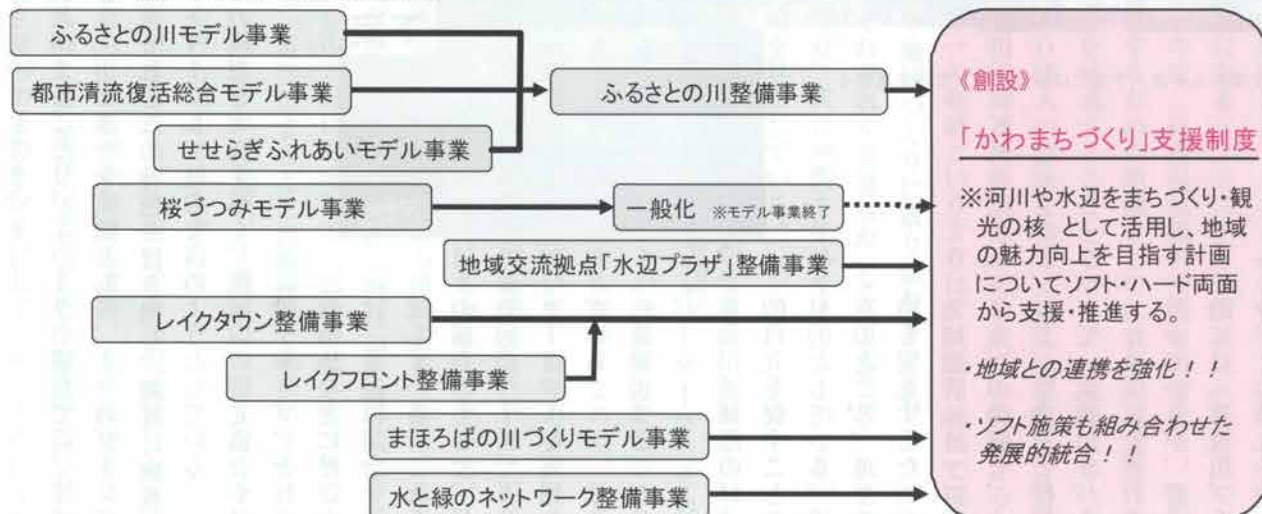
スである河川敷地について、個々の河川の実態に即した適正かつ多様な利用の推進により、国民の河川への親しみを醸成するとともに、景観や自然環境との調和を図りつつまちづくりや観光資源と連携した河川整備を進めてきている。

本稿では、地域との連携を強化した河川や水辺をまちづくり・観光の核として活用することを目的として平成二十一年度の新規制度として創設した「かわまちづくり」支援制度について、紹介する。

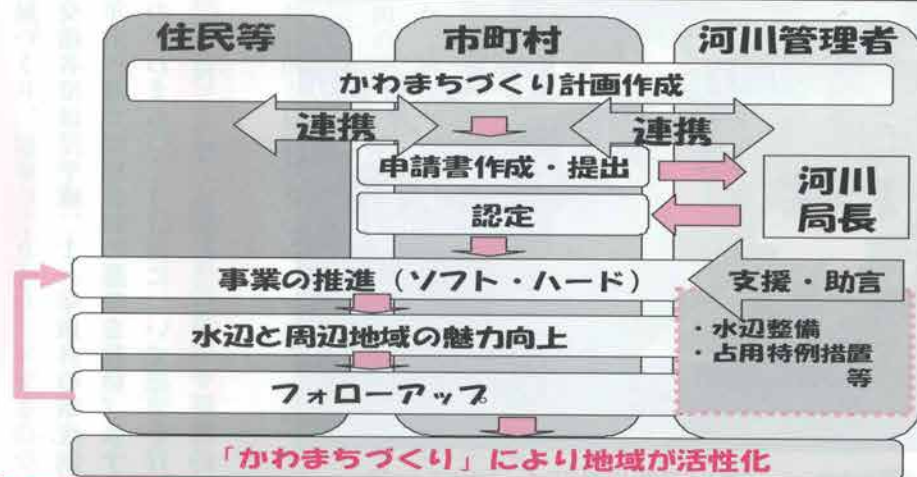
制度概要

国土交通省では、昭和六十年代から「ふるさとの川整備事業」や「桜づつみモデル事業」等の各時代の情勢に応じた多種多様な河川事業をモデル事業として認定し、地域の河川利用に係る取り組みについて重点的に支援してきた。

＜河川モデル事業の変遷＞

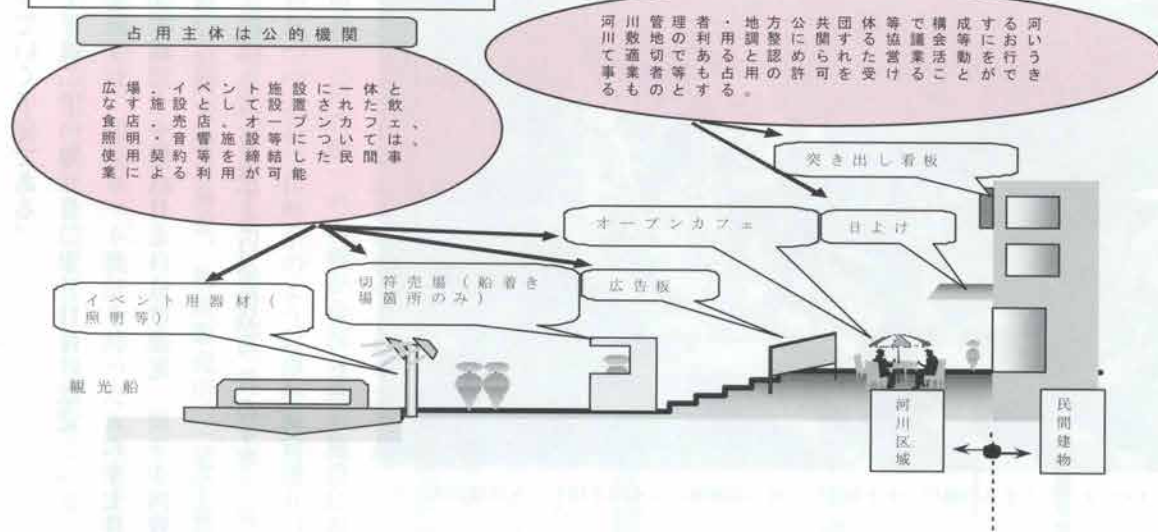


「かわまちづくり」支援制度のスキーム



平成二十一年度に創設した「かわまちづくり」支援制度は、これらモデル事業の制度化から一定期間が経過したことから制度を点検し、新たにソフト施策も組み合わせ発展的に統合したもの。

河川空間利用のイメージ



「かわまちづくり」支援制度は、観光などの活性化につながる景観・歴史・文化等の河川が有する地域の魅力という「資源」や地域の創意としての「知恵」を活かし、地方公共団体や地元住民と

の連携のもとで立案された、実現性の高い河川や水辺の整備・活用計画による、良好なまちと水辺が融合した空間形成の円滑な推進を図るために創設された制度である。

「かまちづくり」支援制度では、従来の河川利活用が目指していた拠点や個別区間での利活用増進という目標を一步推し進めて、広域エリア「まち全体」を視野に入れ、従来のハード整備による支援からソフト・ハード両面から地域活性化に資する河川空間利用を図ることを目指している。

そこでは、河川空間と「人・まち」とのつながり、歴史的価値の高い建築物や豊富な知識や経験、地域への愛着などを持つ人材等の貴重な地域資源の活用や連携といった視点が重視され、事業効果の面的な広がりや他の関連事業への波及効果を期待している。

○ソフト面からの支援

民間事業者による河川敷のイベントやオープンカフェ等の利用制度（河川敷地占用許可準則の特例措置）等の拡充、河川管理者として「地域づくりのためのフオーアアップ」を積極的に支援する。

○ハード面からの支援

水辺散策路や水辺交流拠点等まちづくりと一体となった水辺整備を積極的に支援する。

※次の三つの条件を満たした計画について、積極的に支援することとしている。

①地域の創意としての「知恵」を活かした計画。

②水辺の活用方策が地域において明確となっているもの。

③ 水辺施設の維持管理に地域の協力が得られるもの。

かわまちづくり計画認定状況

国土交通省では、平成二十一年四月の制度創設から同年十一月までに二回の募集を行い、八十自治体等のかわまちづくり計画について認定を行いました。今後とも年一回程度の募集を継続的に

行っていく予定である。

①平成二十一年五月二十二日付け認定

六十七件

②平成二十一年八月七日付け認定

十四件

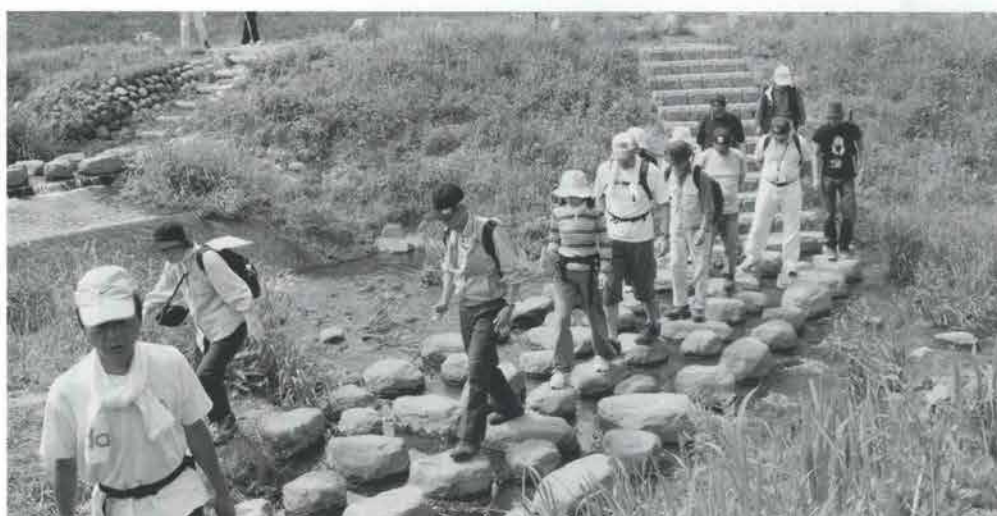
合計

八十件

(※①、②で重複する自治体が一件あり)



博多川（福岡市）地域活性化のため地域が主体となって様々な取組（花嫁舟など）が行われている。



最上川（長野市）フットパスにより川とまちの結びつきを強くし、桜の回廊等による川を核とした地域活性化が行われている。



八軒家浜（大阪市）水都大阪の再生「水の回廊」の取組みとして京阪中之島線の整備と併せ、人々が憩い・集う賑わいの場所を創出している。



川を活かしたまちづくり

「川の駅」が大阪にも、

東京にもできてきた！

—えき（駅・eki）のコミュニティネットをつくる—

NPO法人地域交流センター代表理事 ● 田中栄治

1. 全国各地の「川の駅」

大阪市のど真ん中に位置する大川（旧淀川）の八軒家浜船着き場に、立派な「川の駅はちけんや」ができた。東京の利根川・江戸川流域にもいくつもの「川の駅」の看板ができた。筆者が知っている「川の駅」、ならびにホームページで検索した「川の駅」代表的な施設例をつくってみた（表1）。

地域づくりをリードする起爆剤に

この「川の駅」の概念と、流域に連続してできる川沿いの「川の駅」が、これからの日本全国の河川流域づくり、地域づくりをリードするのではないかと思う。「川の駅」づくりが成功すれば、日本の流域の市町村、住民団体のコミュニケー

ションが大いに進化するものと思う。

2. 「道の駅」から「川の駅」への系譜

古くよりわが国内の移動は、船に依存していた。そこは河岸と呼ばれていたが、名称にこだわらなければ、そこは「川の駅」あったということもできるだろう。そこは水辺の人・物・情報の集散場所であり、まちの賑わいの中心地であった。

現在、「川の駅」の看板が全国各地の施設に掲げられつつある。伊勢市のように伊勢神宮詣りの歴史的拠点にできるものもあれば、カヌー乗り場、川沿いの観光拠点施設、物産販売店、「道の駅」が「川の駅」を兼ねたものなどある。関東の利根川流域では、防災ネット機能を持った人の溜まり場として「川の駅」を位置付けようとしている。

川沿いのにぎわいを広域に実現

私たちが提案する「川の駅」は、全国に普及した「道の駅」が目指していた交流連携の機能を重視している。「道の駅」は、それが実現できていない。川沿いの住民同士の交流や連携を促進し、新たに川沿いの賑わいを広域に実現するとともに、いざという時には、お互いに協力し支え合いの拠点になるとよいと考えている。

ここで、平成五年度に当時の建設省で制度化された「道の駅」から、民間中心の「まちの駅」「海の駅」「川の駅」への系譜を表に整理してみる。

ヨーロッパでは既に、ツーリストのためのインフォメーションセンターが各国、各市に隈なく配備されているが、我が国では「道の駅」が平成三



大阪市の八軒家浜船着き場にできた「川の駅」

表1 全国の「川の駅」の一覧(例示)

No.	河川名	名称・場所等
1	北海道 石狩川	花ロードえにわー道と川の駅ー
2	北海道 十勝川	川の駅 十勝川
3	東北 北上川	いわてまち川の駅
4	東北 最上川	川の駅 ヤナ茶屋もがみ
5	東北 北上川	川の駅 かわさき
6	東北 気仙川	横田 川の駅
7	関東 那珂川	那珂川・川の駅
8	関東 那珂川	川の駅 ながわ水遊園
9	関東 小貝川	河川防災ステーション(建設中)
10	関東 利根川	平成22年春オープン予定「佐原広域交流拠点」
11	関東 那珂川	川の駅 ふるさとセンター茂木
12	関東 利根川	大堰観光
13	関東 利根川	加須未来館
14	関東 江戸川	関宿城博物館
15	関東 江戸川	寅さん記念館
16	関東 江戸川	ニューポート江戸川
17	北陸 神通川	「川の駅」神通川水辺プラザ
18	中部 勢田川	伊勢河崎商人館(川の駅)
19	中部 長良川	子宝温泉・川の駅373
20	中部 千曲川	上田道と川の駅
21	中部 勢田川	河崎・川の駅
22	関西 大川	「川の駅」毛馬桜之宮公園
23	関西 大川(旧淀川)	「川の駅」はちけんや
24	中国 江の川	川の駅 常清
25	四国 四万十川	四万十・川の駅「カヌー館」
26	四国 海部川	「川の駅」という清潔なトイレ
27	四国 勝浦川	川の駅かつうら
28	九州 一ツ瀬川	川の駅「百菜屋」
29	九州 筑後川	川の駅「はらづる」
30	九州 大野川	川の駅 松岡

(09' インターネット・地域交流センター調べ)

「四年に山口県、岐阜県、栃木県での社会実験を経て、平成五年より建設省道路局施策として全国的に採用された。今や全国各地に、約九百カ所できており、車利用者のための休憩場所、道路情報収集場所、物産購入のための施設として重宝されている。

しかし当時、筆者も含めて「道の駅」発想者等が想定した「人のコミュニケーションの場」沿道市町村の交流連携の場としての機能は十分には充足されていない。また、設営主体は、行政がかかわっている事が前提となっている。

この反省から、全国各地の民間有志や、まちづくりグループは、中小道路や、裏道、脇道などで、

民間主体で参加できる(しかも既存の民間施設主体で)「まちの駅」の仕組みを提案した。取り組みが始まって約十年経過し現在、全国約百市町村に千五百カ所の「まちの駅」が設営されてきた。それは施設同士の交流や支え合いを目的にしており、一市町村内に、五十〜百カ所ほど設置されている所もある。つまり、民間を中心にした既存施設活用型の多様な「まちの駅」施設が、駅同士の連携を前提として、まちづくりの仕掛けとして普及してきたのである。

小さな喫茶店、ラーメン屋のような所があれば、大きなビル工場もある。「まちの駅」の看板が市町村役場に架かっている所もある。

「駅」という名の交流拠点が
各地に続々と誕生

さて、この「道の駅」、「まちの駅」の流れをヒントに、「海の駅」、「川の駅」、「山の駅」、「健康の駅」、「まなびの駅」など、「駅」という名称を付した交流拠点が続々と誕生してきている。

もともと「駅」は、当時の国の統治権者が、全国統治のための情報伝達の拠点として、一定間隔に配備したものであり、道沿いに設置された。それが、宿場町として発展し、明治時代には鉄道の駅が全国に敷設され、「鉄道の駅」「駅」自由に入出りできる場として、人の意識の中に定着していったのである。

この鉄道の駅概念が、今や、街に、海に、川に、教育に、健康にと、社会の縦割り政策の枠を超えて、コミュニケーション促進の場・ツールとして活用されるようになってきたのである。

現在、鉄道の駅は、全国に約一万余カ所あるという。鉄道以外の多様な駅が、一万余カ所にもなっており、両者が連携するようになったらさぞかし日本のコミュニケーションの形態は変わるであろう。民主党政権で日本が大きく変わろうとしている折、民間参加を主体にした新しい人間ネットワーク体を作りたいものである。

3. 「川の駅」の定義と実践例

川は全国どここの市町村にもある。川沿いに「まちの駅」機能をもった人の交流拠点が連続すれば、川沿い地域のコミュニケーションが深まるとともに、人の交流に、教育に、健康増進に、経済活性化



化、防災に役立つ。そして、なによりも防災コミュニケーションの形成に貢献すると考えられる。要は、「川の駅」は川沿いにある、水辺地域の多様な活動の活性化につなげようというものである。

平成十九年度および二十年度に、国土交通省利根川水系の河川事務所において、「川の駅」等河川交流拠点について」の調査事業が行われた。その検討会において、地域の現場の人々の自由な発想で活動を推進するという立場から、「川の駅」について、厳格な定義より緩やかな位置づけが望

各種「駅」の取り組みの系譜

年 月	動 き
平成2年1月	中国地域まちづくり交流会において「道の駅」の提案がなされる
3年10月	「道の駅」の社会実験が取り組まれる
～4年4月	山口県阿武・萩地域、岐阜県高山地域・栃木県地域の3地域
5年2月	建設省道路局により「道の駅」制度化される(103箇所が認定される)
8年1月	広島県豊町に「海の駅」が設営される
10年3月	21世紀国土のグランドデザイン(第5次全国総合開発計画が策定される)
	「地域連携軸の展開」が提案される
10年3月	地域連携拠点として「連携センター(後のまちの駅)」を構想し、社会実験の取り組み開始(中部西関東・北東北地域を皮切りに、東海北陸地域、九州地域等)
11年1月	「連携センター」を「まちの駅」と改称(2700通の応募の中から決定)
11年5月	「まちの駅」シンボルマーク決定(570点の応募から決定)
11年5月	各地域で「まちの駅」の社会実験、地域連携軸の取り組みが始まる
12年3月	広島県豊町「ゆたか「海の駅」」を中国運輸局が認知
12年8月	全国「まちの駅連絡協議会」正式発足(現会長:久住時男見附市長)
13年～15年	栃木・茨木的那珂川で「川の駅」の設営:7箇所(1箇所民間、他は公的施設)
14年10月	瀬戸内海「海の駅」設置推進協議会発足
16年8月	北海道から沖縄までの「日本ぐるっと一周・海交流」イベントにおいて「海の駅」の提唱
17年10月	「健康の駅」推進機構発足・「健康の駅」の認証始まる
18年11月	全国「海の駅」連絡協議会発足
19年5月	多様な「駅」ネットワークのため省庁横断型「コミュニティステーション研究会」を提案
19年7月	社会資本整備審議会河川部会で「川の駅」の整備方向が答申される
19年10月	東京での「安全・安心ワークショップ」で防災のための「まちの駅」、「川の駅」が提案される
19年度	教育分野の新システムとして学びの駅の検討が始まり、「まなびの駅」の実践が始まる
19年10月	「川の駅」マークが公募され、選定委員会(座長:芝浦工大中野恒明教授)で選定される
20年5月	提言・実践首長会で「川の駅」への取り組みを決定。「市町村川の駅推進協議会」「全国川の駅推進実行委員会」が発足
20年度	利根川・江戸川(国土交通省)、および大阪の旧淀川(大阪商工会議所ほか)で「川の駅」の実験が始まる
21年8月～10月	大阪の旧淀川で、「川の駅はちけんや」が建設され17か所で「川の駅」の社会実験
21年10月	全国「川の駅」フォーラムin大阪に、北海道、九州、大阪、東京等のメンバーが集まる

※21年10月現在の全国の概数:道の駅約900カ所、まちの駅1500カ所、海の駅120カ所、川の駅200カ所(推計)、健康の駅12カ所となる。

ましいという考えで、次のように定義づけられた。

「川の駅」は、川の近くにあるか、川の活動に関係した施設で、地域住民や水辺の訪問者等にトイレや休憩の場所を提供し、地域に関わる情報を提供する場所であり、人と人の出会いや交流をサポートし、人がいて簡単な受け答えができるような場所である」とされた。

それは、舟着き場といった水面利用と直結した施設ではなく、川沿いの人の「溜り場」として、流域住民等が交流し、相互に協力し支え合いができる仕組みとしての機能を期待したものである。

水辺のにぎわい回復が流域の人・モノ・情報交流を促す

関東圏を流れる利根川は、源流のみなから町から、前橋市、伊勢崎市、取手市を流れ銚子で太平洋に注ぎ、江戸川は野田市地区で利根川から分流し、杉戸町、春日部市、松戸市等を経て、東京都江戸川区に至る。現状では、この流域住民の県境や、市町村域を越えた定常的交流は極めて少ない状況である。

この地域で平成十九年、二十年に、約四十カ所の「川の駅」設営の試みが行われた。「川の駅」の仕組みが定着すれば、水辺の賑わいが回復し、流域の人・モノ・情報の交流も促進され、市民主体の防災コミュニケーションも深まることが期待される。

とかくこれまで、河川および周辺空間での複数市町村の活動はバラバラであった。国主体での従来の活動理念は治水、利水、環境であったが、私たちは「川の駅」促進においては、かつば(K8)作戦を提案している。つまり、Kで始まる①川活用、②環境、③健康、④教育、⑤観光、⑥交流、⑦経済活性化(事業活動)、⑧危機管理(防災)である。「川の駅」では、これらキーワードに関わる多様な活動を複合的に取り込んでいくというものである。

なお、平成二十一年八月二十二日から十月十二日に行われた、水都大阪二〇〇九における「川の駅」実験は、船着場九カ所、水辺店舗六カ所等の計十七カ所で「川の駅」設置実験が行われた。ここでは船着き場、船利用を中心に、観光、経済活

江戸川

江戸川流域の川の駅実験地マップ



江戸川かわまちづくり
「河川交流拠点」社会実験
川の駅実験地マップ
2009.3 ver.001



性化等を目指したダイナミックな提案が行われたのである。

4. 「川の駅」の全国展開に向けて

平成二十年度に、全国の有志市町村首長（約三十五人）が母体になった「市町村川の駅推進協議会（会長・長岡市森民夫市長）」、および全国各地で川活動に取り組む学者・民間人等で構成する「全国川の駅推進実行委員会（代表世話人・中野恒明・芝浦工大教授ほか）」が発足している。

私たちは、これらメンバーとNPO法人全国水環境交流会等の協力連携のもとに、全国スケール

での「川の駅」を軸にした流域づくりネットワークを構築しようと考えている。

それが、従来の国土交通省河川局中心の河川政策に対して、市町村や住民団体、民間企業ネットワーク中心の連携体を構築し、新たな社会改革を推進する母体づくりにもつながると考える。

つまりそれは、川の上中下流をつなぐ「山の駅」、「道の駅」、「川の駅」、「まちの駅」、「海の駅」などの多様な場所、テーマをつなぐ横断的なコミュニケーション体（eki連携体）を構築することでもある。

社会で発生する諸事象を総合的に調整できる人

は、建前上、日本では総理大臣しかない。しかし、現実には鳩山新総理が日本の全てを掌握できるかという、実際には無理であり、地域の市町村長に委ねざるを得ない。さらに細部に至れば、あらゆる現場で活躍する多様な諸主体が善玉バクテリアのように汗をかき合うことが期待される。多様な交流拠点（eki）の連合体が、くにつくりという総合的視点で、自由自在に横交流できる仕掛けづくりが望まれる所以でもある。

流域づくりネットワークへ 多様な推進体制を構築

川というあらゆる生命の起源にかかわる場所のコミュニティ拠点同士が、川を軸として、縦、横、斜めにコミュニケーションする仕組みをぜひ実現したいものである。「川の駅」は、そのような多様なコミュニティネットワークの仕掛け、仕組みを考えさせてくれる重要な基点だと思う。

この十月一日に、「川の駅」に関心を寄せる東京グループ、「川の駅」の設置社会実験に取り組む大阪グループが中心になって、「川の駅はちけんや」等を見学するとともに、川の駅共同フォーラムをおこなった。

そして、このフォーラムをきっかけに、全国各地に先端性の高い「川の駅」モデルを作るとともに、多様な主体による推進体制を構築することを申し合わせた。中心メンバーで「大阪東京川の駅推進連携チーム」を構成し、東西で「川の駅」推進活動を行うこととした。志高い大阪・東京のメンバーで、実行力と影響力のある東西活動を進めたい。

読者の皆様のご協力も得たいと考えている。



川を軸に地域連携を拡大

—大阪で全国「川の駅」フォーラム開催—

国土交通省が今年度から創設した「かわまちづくり」支援制度は、これまでのふるさと川の整備事業や、地域交流拠点「水辺プラザ」整備事業などを発展的に統合させ、新たにソフト施策を組み合わせたものである。

従来の施策で打ち出した「拠点や個別空間」での利活用促進という目標を一步推し進め、広域エリアの「まち全体」を視野に入れながら、ソフト・ハードの両面から地域活性化につながる河川空間の利用促進をめざしている。

国による河川交流拠点づくりへの後押しを背景に、自治体や民間団体による地域の交流拠点となる「川の駅」の取り組みも広がっている。それは地域住民の活動の拠点となり、まちづくりの拠点の役割も担うものと位置づけられている。

「川に背を向けた」過去を教訓に

こうした「川の駅」にかかわる各地の取り組みや施策を報告し合う「全国『川の駅』フォーラム in 大阪」(大阪商工会議所、全国川の駅推進実行委員会など共催)が十月一日、大阪市で開かれ、民間団体や行政職員、市町村長、大学教授・専門

家らが参加した。

大阪では八月下旬から十月上旬まで、「水都大阪『川の駅』社会実験二〇〇九」と名付けたプロジェクトが官民協働で実施されていた。このためフォーラムに先立ち、市の中心部を流れる土佐堀川、東横堀川、道頓堀川、木津川をつなぐ「水の回廊」を、土佐堀川に面した八軒家浜船着き場からクルーズで一周する視察も行われた。

フォーラムでは、川の駅の推進により広域的な交流・連携をめざす市町村で構成する「市町村川の駅の駅推進協議会」の会長代行である久住時男、新潟県見附市長らがあいさつした。

久住氏は「ふるさとの川は上流から下流までつながっている。かわまちづくり支援制度がスタートする中で、地域を再構築するためにも、同じ流域で市や町がさらに連携・交流していくことが大切」と述べ、地域の連携強化を訴えた。

また、大阪商工会議所の水辺のランドスケープ研究会が、「水都大阪『川の駅』社会実験二〇〇九」について現状報告した。

それによると、大阪の川はかつては生活の場でもあったが、舟から陸上へと交通手段が変化し、

度重なる被害を受けて安全優先の改修が行われ、河川の汚濁も広がった。その結果、「川を埋める」「蓋をする」「背を向ける」など、かつて宝をもたらし川はいつしか厄介者になり、川への関心が遠のいた、という。

そうした過去の反省から、今日では「水都大阪」の再生をめざし、美しい景観で関心を引き付けるなど川に対する再認識・再評価や、舟運の振興、水辺のにぎわいづくりなどを通じて、川を活かしたまちづくりが活発化していると説明した。

上・中・下流の地域交流促進を

都市部の河川と地方の広大な河川流域などでは、川に対する取り組み方も異なるが、東京首都圏や九州など他地域からも、川と地域の多様な取り組み事例が報告された。

フォーラムではまた、橋爪紳也・大阪府立大学特別教授、中野恒明・芝浦工業大学教授、陣内秀信・法政大学教授ら専門家や久住時男見附市長らがパネラーとなり意見交換。「環境対策でも災害対応でも、下流を守るためには、上流に位置する地域や住民はいろいろと考えなければならぬ。そのためにも、地域間のコミュニケーションや交流促進が必要」などの意見が出された。

最後に「川の駅推進アピール」をまとめ、川の上・中・下流の駅同士がお互いに協力・連携し、流域の人々の交流促進に向けた活動を「川の駅」を通じて推進していくことや、「まちの駅」など他の交流拠点施設と連携し、ネットワーク効果を高めていくことなどを呼びかけた。

(編集部)

「景観によるまちづくり」 小布施の取り組みを総合的に学ぶ

(財) 地域活性化センターは、地域再生の担い手の育成を目的として、各地の実践者を講師に迎え、フィールドワークやグループワークを通してそのノウハウを共有する研修会「地域再生実践塾」を毎年、全国五カ所で開催している。本号では、第三回小布施町開催分についての報告及び、参加者レポートを掲載する。

第三回「地域再生実践塾」は九月十四日から三日間、「景観によるまちづくり」をテーマに、全国各地から三十一人が参加し、長野県小布施町で開催された。

小布施のまちづくりの取り組みは、常に住民が主体となり、専門家を交えつつ、行政と協働して進められてきた。現在も、農村振興、産業育成、景観資源・地域資源の発掘や利活用、さらにはワークシヨップ等、数多くの分野での取り組みが行われている。

家業にも忙しい住民同士が多くの任意団体を結成し、新たなまちづくりの取り組みに向けて活動している。事実は、人口一万二千人の町の規模

からしても驚異的である。

主任講師には、東

京理科大学教授で、小布施町と東京理科大学が共同で設立した「東京理科大学・小布施町まちづくり研究所」の所長を務める川向正人氏をお迎えした。景観形成を起点に進められたまちづくりの取り組みを講義形式で振り返り、フィールドワークを通してまちの現在を学んだ後に、小布施町のまちづくり

の将来について提言を行うというカリキュラムを通して、まちづくりの理念とは本来どのようなものであるべきか、を考察した。

■「外はミンナのもの、内はジブンのもの」

初日は、主任講師の川向氏が小布施町のまちづくりについて総論の講義を行い、続いて小布施町の修景事業に主導的な役割を果たした(株)小布施堂代表取締役・市村次夫氏が、まちづくりにおいて地域独自の歴史・文化を重んじることの重要性を説きつつ、修景事業のきっかけとその取り組みについて講演した。

修景事業のみならず、小布施町の公共建築の多くを手掛けてきた建築家・宮本忠長氏、久保隆夫氏と川向氏との鼎談では、住民が自分たちの生活環境を整えつつ、生活空間を来訪者とも共有するという「外はミンナのもの、内はジブンのもの」という理念に基づいて実施された修景事業について、専門家の視点から解説が行われた。

また、財団法人北斎館理事長・唐沢彦三氏は、四期十六年にわたる町長としての実績・経験を踏まえ、来訪者に向けて私家の庭を開放する「オープンガーデン」や、町民の欧



受講者の質問に答える市村小布施町長



フィールドワークで小布施町中心部の修景地区を歩く

州視察研修、拠点施設の整備など、「花のまちづくり」に取り組んできた事例を紹介した。

■小布施のまちづくりの第2ステージに向けて

二日目は、川向氏のコーディネートのもと、小布施のまちづくりの未来を担う実践者として、小布施ワイナリー・曾我彰彦氏、(株)松葉屋本店代表取締役・市川博之氏、(有)穀平味噌醸造場代表取締役・小山羊史氏が、それぞれの目指す将来的な取り組みを発表した。

フィールドワークは二部構成で行われた。前半は、少人数の班に分かれ、小布施町中心部の自由視察を行った。後半は、小布施ワイナリーや農園の協力を得ながら、参加者全員で郊外の農村地域を歩き、蚕室建築や文化財、栗林や里道などの景観を視察し、小布施町のまちづくりの取り組みを総合的に学んだ。

■生き生きとした景観から、生き生きとした町へ

フィールドワークの終了後、参加者は再び班別に分かれ、これまでの講義やフィールドワークを踏まえ、小布施町のまちづくりの将来について、提言をまとめた。

三日目は、小布施町長・市村良三氏、副町長・小西勝氏を迎え、前日

にまとめた提言を各班が発表し、主任講師・川向氏と市村町長を交えて、講評及び検討を行った。

最後に、主任講師・川向氏から、二日目のフィールドワークでの実地体験も踏まえた総括講義が行われ、「まちづくりマニフェスト」と題して、「あるものを活用し、コストのかからぬ工夫をすること」や「無理をせず、出来ることから取りかかること」「他人まかせにせず、自分から動くこと」「生き生きとした景観は、人々の活力に満ちた生活から生まれるという基本を外さぬこと」など、九カ条の提案が行われた。鳴りやまぬ拍手の中、小布施町での地域再生実践塾は幕を閉じた。

業務第一課 ● 土井健司

実践塾を受講して

■景観によるまちづくりの主役は地域に暮らす住民

小布施町は、景観によるまちづくりの先行事例地であり、修景地区の小布施堂周辺や、春夏秋冬を通じて花の絶えることのない道、住民が庭を開放するオーブンガーデンなどがあって、県内外から多くの観光客が訪れている。

しかし、小布施町のまちづくりは、観光振興を目的として美しい景観を

整備したものではない。住民が主体となり、自分たちの地域を生活の空間として住みやすく暮らしやすいものにするため、数十年も前からじっくり取り組んできた数々のまちづくりの成果によって、多くの観光客をひきつけている今日がある。

その住民主体の取り組みは、時間がかきたらやる、お金がかきたらやる、けれど決して無理はしないという、自分たちの身の丈に合った方法で行っていた。

これが、小布施町の住民主体のまちづくりが数十年間続く秘訣であり、今後とも継続されていくのはもちろん、若い世代の新たなまちづくりの活動へともつながっている重要なポイントであることが感じられた。

そもそも景観とは、風景と地域に暮らす様々な人々や地域の歴史・文化によって形成されるものであり、一つの型に収まるものでも、単純にモデル化できるものでもない。

これまで全国各地の景観によるまちづくりの取り組みを見聞きする機会があったが、目に見える風景だけをとらえ、整った古い建物や標識だけを意識してしまっていたように思う。また、景観を整備することは観光客を誘致することに重点をおいた

取り組みであると無意識のうちに思い込んでいたのではないかと、と改めて反省させられた。

「景観によるまちづくり」とは、建物などの「もの」が主役なのではなく、また観光客が主役となるわけでもない。その地域に暮らす住民が主役となって出来るものであることを知った。住民が主体となつて出来るようになってきたまち並みは心地よく、フィールドワークで体験した、自然と調和する暮らしの風景やオーブンガーデンに感じるおもてなしの心などに、小布施の歴史を宿す景観の力を感じた。

久留米市 ● 永松 克



フィールドワークでの説明に熱心に聞き入る受講生

ローカル線に地域づくりの夢を乗せ —JR加古川線沿線で住民が相互交流—

兵庫県は、県民主役・地域主導のもと、二十一世紀初頭のめざすべき社会像とその実現方向を明らかにした「二十一世紀兵庫長期ビジョン」を策定した。このビジョンは、全県的な視点で取り組む「全県ビジョン」と、歴史、風土、文化などを共有する圏域ごとに、住民自らが地域の望ましい将来像を描き、その実現に向けて主体的に取り組む「地域ビジョン」により構成されている。

今回訪ねた「歌声列車の会」は、「光り輝かそうJR加古川線沿線活性化

を図る会」の略称。会員の一部は、東播磨地域ビジョン委員会の委員にも名を連ね、歌声列車の会の取り組みが、地域ビジョン重点行動プランの一つとして位置付けられている。

JR加古川線沿線地域の活性化と沿線住民の皆さんの相互交流を目的に運行を始めた「歌声列車」。その運行を通して、地域づくりに取り組む「歌声列車の会」の皆さんに話そうかがった。

歌声列車 出発進行！

JR加古川線は、兵庫県を南北に、加古川駅から丹波市の谷川駅までを結ぶ、全長約五十キロメートルのローカル線である。平成七年の阪神・淡路大震災により周辺路線が寸断された際、迂回路線の一つとして活用された経緯などから機能強化を求める声が高まり、平成十六年十二月、全線電化が実現した。

しかし、沿線市町に知名度の高い観光地などが少ないことや、運転される列車の本数も多くないことから、沿線住民の皆さんが通勤・通学のために利用するケースがほとんどだった。

平成十七年四月、JR加古川線の乗降客数が年々減少傾向にある中、「電車にちなんだイベントを通して利用促進と沿線地域の活性化を図りたい」との思いを、当時の会員がJR西日本へ足繁く通い訴えた。当初、JR西日本側は、沿線住民の皆さんとのタイアップによる企画列車の運行に慎重であったが、会員らの熱意に動かされ協力体制をとってくれるようになったという。

平成十七年十二月十八日、JR加古川線電化からちょうど一年。

歌声列車の「一番列車」が加古川駅のホームを出発していった。昭和三十年代、全国的に流行した歌声喫茶を現代風にアレンジ。貸切電車内

に、五人編成（テナーサックス、アルトサックス、キーボード、ドラム、ベース）のバンドを乗せ、生演奏に合わせて懐メロや童謡、唱歌などをみんなで熱唱した。

「第一回目は、まさに見切り発車。とにかく、電車の中で歌って楽しめ、ましようという思いが強かった」と、会員のひとりが懐かしそうに振り返る。ただ、一回目の実施後、参加者から「次回の運行はいつ?」「共催イベントをもっと増やしてほしい!」など、大きな反響があった。

同時に、新聞やテレビといったマスメディアでも大きく取り上げられるなど、「JR加古川線の利用促進を図り、沿線地域の活性化につなげたい」という目的で始めた歌声列車



歌声列車内の様子

★ 団体プロフィール ★

設立年：平成17年4月
設立・運営主体：任意団体
代表者：三村 修
会員数：28人
＜連絡先＞
〒675-8566
兵庫県加古川市加古川町寺家町
天神木97-1
兵庫県加古川総合庁舎内
ビジョン室
(電話・FAX) 079-421-2289

への関心は、予想以上に高いものがあつたという。

みんなの力が推進力に！

平成十八年からは、年二回の定期運行を開始した歌声列車。

当初は、東播磨地域ビジョン委員会の委員やそのOBらが中心になつて「歌声列車の会」をたちあげたものの、運行を重ねるうちに、「ぜひ入会して、地域活性化のお手伝いをしたい！」と、沿線住民の皆さんの入会が増えてきた。

また最近では、歌声列車乗車中に声をかけられることもしばしばあるとのこと。これまでの地道な取り組みが実を結びつつある一つの成果と言えよう。会員数は少しずつ増え、



ヘッドマーク付きの車両

現在二十八人。

「毎回、趣向を凝らした電車を走らせるためには、多くの沿線住民の皆さんのアイデアが必要！」と、会員と会員数を増やしたい！と、会員の歌声列車にかける情熱は、ますます拍車がかかりヒートアップする一方である。

昨年十二月には、会員の悲願でもあつた、歌声列車の「ヘッドマーク」が完成した。デザインを考案したのは、「歌声列車の会」の取り組みを支援する東播磨地域ビジョン委員のひとり。JR西日本の製作・協力により、第七回目の運行から、電車の前後に掲出している。

また、JR加古川線沿線にある西脇市出身の美術家、横尾忠則氏デザインによるラッピング電車が平成十六年の電化時から順次運行。JR加古川線へ沿線住民の皆さんの興味をひきつけるユニークな企画として、歌声列車運行を後押ししてくれている。

山越え、谷越え

順調に運行を続ける「歌声列車の会」にも山や谷がある。

今年六月に実施した第八回目の参加者募集の際には、応募者がついに

四百三十人を超え、競争率は五倍近くにもなった。「できるだけ新規の応募者に乗車してもらいたいという方針から、参加者の抽選には毎回、頭を抱えている」と、会員のひとり

は悩みを打ち明ける。以前、運行車両を二両から三両に増やすことも考えたものの、「歌声列車の会」の運営能力と停車するホームの構造的な問題などにより、現在のところ断念しているとのこと。

また、運行列車の準備にあたり、スピーカーやキーボード、ドラムといった機材運搬・設置に大変苦慮しているという。女性スタッフが多くの力不足は否めないものの、口を大きく開けて楽しそうに歌う参加者の顔を思い浮かべながら、協力して作業を行っている。

列車運行による新たな動きも

今年の十二月には、第九回目の運行を控えている「歌声列車の会」。

近年では、継続した取り組みがきっかけとなって、JR加古川線の利用促進と沿線地域の活性化という目的とともに、東播磨地域と北播磨・丹波地域の皆さんとの相互交流も進み始めている。中でも、二カ月に一回、JR沿線の活性化等について考

える三地域合同協議会の発足は、その好例といえる。

さらに、JR加古川線のほぼ中間、北播磨地域の西脇市駅において、沿線住民の皆さんが、歌声列車の停車時間（歌声列車運行時のみ行き帰り合わせ約二時間）を利用した写真や絵画、陶芸品の展示、地場野菜の販売等を行い、参加者との交流を深めている。まさに、「歌声列車の会」の取り組みが沿線住民の皆さんに受け入れられ、新たなルールが敷かれた何よりの証である。

「歌声列車の会」の取り組みは、今後とも各駅停車しながらゆっくりと、しかし着実に進んでいくことだろう。急ぐ必要はない。列車は沿線地域の活性化という終着駅に向かって、歌声を響かせながら走り続けてゆく。

編集委員 ● 齋藤 誠



歌声列車の会の皆さん

希望ある元氣な町をめざして —行政依存から自立した協働のまちづくり—

大鰐町は、津軽最古の温泉地として八百年もの歴史を誇る。また競技スキーのメッカで、全国のスキーヤーにも広く知られ、「スキーといで湯の里」として栄えてきた。しかし、時代とともにスキーブームは去り、温泉の宿泊客も減少し、町からかつての輝きが消えて随分長い。リゾート開発の失敗による負債や観光客の減少、人口減少や高齢化などにより、町の財政がひっ迫する中、

町民たちは「このままでは夕張市のようになるのではないか」という危機感を募らせている。

ワークショップで

町の魅力や宝を再発見

このように将来に希望が持てず、地域に閉塞感が広がる中、町の沈滞ムードを払しょくするため、様々な職種で構成される十六人のメンバーが集まった。メンバーは「大鰐町の良いものを再発見し、わが大鰐町を希望ある元氣な町にする」をスローガンに掲げ、まちづくり団体「OH!!鰐 元氣隊」(以下、「元氣隊」という)を結成した。

従来の行政依存から自立し、持続可能な活性化を目指し、まずはじめに活動の方向性を決めるため、町内から参加者を募りワークショップを開催、大鰐町の「いいところ・悪いところ・将来の夢」を洗い出した。

参加者からは「町のよいところ」や「地域の宝」が次々と挙げられ、自分たちの町には素晴らしいものがたくさんあることを再確認した。

平成二十年度には、NPO法人「NPO推進青森会議」との協働による事業が、内閣府の「地方の元氣再生事業」に採択された。

事業では、ワークショップの結果を活かし、①特産品である「大鰐温泉もやし」のプレミアム化 ②町の中心施設である、地域交流センター「鰐come (ワニカム)」の活性化 ③教育旅行の誘致に向けた体験プログラム開発や指導者の養成—など、様々な活動を行っている。

その結果、東京の料理店での大鰐温泉もやしのメニュー化や、来秋の修学旅行誘致の成功など、活動の成果が始めている。

また、今年六月からは、ワニカムの指定管理者として、元氣隊の有志

から成る「プロジェクトおおわに事業協働組合」が町から指定された。元氣隊は活動拠点を得るとともに、「管理者が変わって、ワニカムのサービスがよくなった」と利用者の評判もよく、住民への元氣隊の活動の認知度が高まってきている。

協働の活動にこそ大きな成果が

これらの活動は、いずれも元氣隊だけの力ではなしえない。町内には観光協会・温泉協会・婦人会・町内会など、主要な団体だけでも十八の団体があり、イベントや活動の際には、いつも行政やそれらの団体が連携して取り組んでいる。

★ 団体プロフィール ★

設立年：平成19年8月
運営主体：コミュニティ組織
代表者：菊池 啓介
会員数：約130人
(コアメンバー16人)
事務局連絡先
大鰐町大字蔵館字川原田72
電話 (0172) 48-5405



ワークショップの様子



町の拠点施設「鰐 come」



野菜作りを学ぶ、元気隊キッズ

町では古くから、スキーの全国大会など大小問わず多くの大会が開催されており、その都度、各団体が連携しイベントに取り組んできた歴史があるため、協働の素地があった。一つひとつの団体は小さいかもしれないが、協働して取り組むことでより大きな成果を得られることを、古くから住民たちは知っている。

また、農商工でも連携を図っており、ワニカムでの農産物の販売や、大鰐もやしの増産や販路の開拓など、町内外での様々な協働による活動の輪が広がっている。

元気隊の活動で注目すべきは、大人たちだけでなく、未来の町の担い手である子どもたちまで巻き込んでいることである。今は、町に元気がないかもしれないが、子どもたちに「大鰐町出身です」と胸を張って言ってもらえるようにしたいと、小学生による「元気隊キッズ」を作り、故郷を思う心を育てる取り組みを進めている。

元気隊キッズでは、元気隊を講師に迎えて、町に関する授業を受けた後、「大鰐町の未来」について考え発表を行ったり、他の団体とともに町の清掃活動を行ったりしている。今年、さらにその活動を広げ、小学校の敷地内などで地元の野菜ソムリエの方に教えてもらいながら、トマト・じゃがいも・枝豆・大根などの野菜づくりを行っている。

未来の担うこともたちが 活動を通じ考え・学ぶ

収穫した野菜は、東京・飯田橋にある青森県のアンテナショップで販売したり、西新橋にあるレストランに提供し、試食会を行ったりする予定だ。子どもたちは、単に野菜づくりを学ぶだけではなく、自分たちが育てた野菜が商品として店に並び、消費者の手に渡り利益を得るまでの流れや、有名レストランで自分たちの野菜がどのように提供されるかを学ぶことができる。

この取り組みの仕掛け人の一人である元気隊の隊員・相馬康稷氏は「この経験が、こ

どもたちに職業意識を与え、いつか町で農業に携わったり、料理人になったりする子が生まれることを期待している」と語る。単なるイベントで終わらせるのではなく、町の将来を考えた息の長い活動を行っていることがうかがえる。

隊長の菊池啓介氏らに、課題や悩みを尋ねると「悩みなんて飲んで寝てしまえば忘れてしまう。強いて言えば、専任の隊員がいなかったため、活動に専念できないことが悩み」と答えた。さらに、「何をやってもだめだ」という、沈んだ町の雰囲気を感じ上げるために元気隊はある」と力説した。

来年は、NPOとの連携による内閣府採択の事業が終わり、自立の年となる。それまでに少しでも多くの経験を積もうと、今は精力的に様々なイベントや活動に取り組んでいる。今年九月に開催された「第五回羽州街道交流会 青森県大鰐大会」もその一つだ。

町の小さな「希望」を育てていく元気隊の活動は、町内だけでなく、町外や次世代の子どもたちへと広がりを見せ、集まった小さな希望がいつか大きな希望へと実を結ぶことが期待される。

映画ロケのまち 上田の熱気

「サマーウォーズ」が与えた影響

うえだ城下町映画祭実行委員会事務局
上田市教育委員会文化振興課

● 松井宏典

上田は、戦前からロケ地として採用されてきた歴史がある。小津安二郎、黒澤明、山田洋次、映画に興味がない人も一度は聞いたことがある。巨匠たちも、作品の舞台に上田を選んでいる。

その理由はというと、日本の原風景的な景観の存在や変化のはっきりした四季、晴天率の高さなど、上田の自然環境が映画撮影に適していることが挙げられる。

しかし、自然環境の良さだけがロケ地、上田の魅力ではない。自然環境以外に上田がロケ地に選ばれる理由は、ロケに対する積極性にある。

上田市では、ロケ地で行う映画祭として、「うえだ城下町映画祭」を一九九七年から開催している。ロケ地で撮影された映画を映画祭で上映することを大きな使命としながら、

市民にも実行委員会メンバーに入ってもらい、映画上映や映画関係者によるゲストトーク、自主制作映画コンテストなど、いろいろな企画を行っている。

地域の方々からしてみれば、自分の知っている風景が映画に出てくれば非常に感慨深いものになるし、地域外の方々からすれば、映画に出て来る風景を実際に見ることで、より映画を楽しむことができる。

高い専門性もつ職員が ロケ誘致の活動

ロケ隊の受け入れも積極的に対応し、さらにロケ隊の呼び込みにも動き出した。「信州上田ロケ地ガイド」という冊子を作り、映像制作関係者に送付するなど、ロケ地上田を売り込む試みも行い、ロケ誘致に大きな

効果をもたらしてきた。

二〇〇一年には長野県で初めて、全国でも十番目となる「信州上田フィルムコミッション」が設立され、高い専門性をもつ職員によるロケ誘致の活動が現在も行われている。

近年は「信州上田フィルムコミッション」の誘致活動により、さまざまな話題づくりが上田で撮影されており、地域の方々もエキストラで出演するなど、ロケに対する興味が高まっていた。

しかし、今夏に公開された映画で上田は少し違った盛り上がり方を見せた。今年八月、上田をそのまま舞台としたアニメーション映画

「サマーウォーズ」（細田守監督）が公開され、上田のまちが「サマーウォーズ」一色に染まった。

「サマーウォーズ」の里 信州上田」と銘を打ち、商店街にはポスターが貼られた。なかには、ポスターを自作した自治会も現れた。

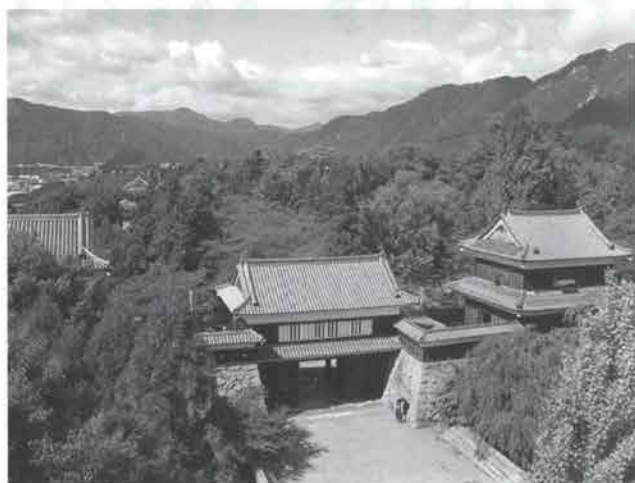
さらに駅前や商店街の通りには幟旗が立ち、専用のホームページまでつくられた。最近、上田駅前には巨大なタペストリーも飾られ、上田に

来た人を迎えている。

劇中に登場した夏祭り 「上田わっしょい」

また、劇中に登場するものから盛り上がりを見せたものもある。劇中に、上田の夏祭り「上田わっしょい」が登場したことにより、今年、実際に行われた「上田わっしょい」では「サマーウォーズ」に登場するキャラクターに扮した踊り連が登場し、会場を大いに盛り上げた。

ちなみに、劇中の舞台設定は来年、二〇一〇年の上田のまちを想定しているとのこと、劇中の「上田わっ



ロケ地としても使用される上田城



今年で13回目の「うえだ城下町映画祭」

しよい」は来年の開催予定日に行われている。

それを受けた一部の上田市民が有志で、「来年、もう一度サマーウォーズで盛り上げよう」と「サマーウォーズ二〇一〇実行委員会」を立ち上げている。

具体的に何をするかは未定だが、来年も「サマーウォーズ」で盛り上げるよう仕掛けるようだ。

そして、映画に登場するシーンのモデルとなった場所を紹介するマップも作られた。劇中では、花札の「こいこい」が使用されることから、このマップも「こいこいマップ」と名付けられ、ロケ地を巡るスタンプには花札がデザインされている。

上田市も「サマーウォーズ」のPRに力を入れているが、それ以上に地域の方々が映画を二倍にも三倍にも楽しめるような工夫をしている印象を受ける。「サマーウォーズ」は、映画のロケ地としての上田だけでなく、映画の舞台として上田を取り上げてくれた。

ちなみに、この「サマーウォーズ」は、今年の「第十三回うえだ城下町映画祭」でも上映する。「サマーウォーズ」のテーマである「家族と絆」は、今年の映画祭のテーマである「絆」と重なる。

「サマーウォーズ」も劇中で「家族の結束」という絆を見せているが、そのほかにも「絆」をテーマにした映画が数多く存在する。様々な監督が描く「絆」を楽しんでいただけばと思う。

ロケ地活用した取り組みが地域振興につながるよう期待

今年「サマーウォーズ」により、ロケ地上田は異様なまでに盛り上がった。上田の映画館で「サマーウォーズ」を鑑賞したい、とはるばる遠方からこられた方もいた。上田での上映期間が終わった今でも「サマーウォーズ」の当地での上映を望む声は多い。「サマーウォーズ」の

熱は当分、冷めそうにない。

今後、上田で撮影される映画が、市内で「サマーウォーズ」のように盛り上がりを見せるかは未知数ではあるが、「サマーウォーズ」の熱が

各地で盛況、映画祭やロケ誘致

映画と地域づくりは、今や密接な関係にあるようだ。全国各地で毎年、多彩な映画祭が幾つも開かれている。世界的な規模の国際映画祭には無論かなわないが、それぞれ特色ある地方映画祭は地域にぎやかさをもたらし、まちの活性化にもひと役買っている。

映画のロケ地候補となる地域では、ロケ隊誘致も盛んだ。地域と映画の関係で定番の仕組みは「フィルム・コミッション」。映画やテレビドラマ、CMなどあらゆるジャンルのロケ撮影を誘致し、実際のロケをスムーズに進めるための非営利公的機関である。

地方公共団体が担当している場合、その部署は観光課などの関連部署に置かれる例が多い。二〇〇〇年ごろから本格的な活動が始まったが、上田市でも〇一年にはFCを設立した。現在では、国内に百カ所程度あるという。

冷めた後も、ロケ地を活用した様々な取り組みが地域振興に貢献できれば、と思っている。

興味を持たれた方は、ぜひ、上田を訪れてみてください。

FCの連絡機関である「全国フィルム・コミッション連絡協議会」によると、FCの存在により映画制作側は、撮影場所や宿泊所の手配、エキストラ募集などの作業を地元の協力で円滑に行え、制作コストも抑えられる。

一方、地域にとっては、映画撮影の誘致によるロケ隊の宿泊・食事など直接的な経済効果のほか、「映画の舞台」として全国にPRできるメリットがある。

それが観光客の増加や地域の文化振興にもつながる。このため、映画をテコに地域活性化やまちづくりを目指す自治体間でロケ誘致合戦は激しさを増しているようだ。

インターネット上には、全国のロケ地候補を探すデータベースサイトも登場。今年は東京国際映画祭の共催イベントとして「全国ロケ地フェア」も開催された。映画と地域の相互関係がどう発展していくか注目したい。

(編集部)

地域だより

若手職員がガードレールを ペイント―北海道美瑛町

北海道美瑛町の若手職員によるプロジェクトチーム（PT）は今年度、都市建築部の道路補修費のうち十万円でペンキとはけを購入し、町道沿いのガードレールとガードケーブル支柱の約六十メートルをこげ茶色にペイントした。

PTは、同町が提唱する「日本で最も美しい村」連合の理念を庁内外に広めるとともに、美しい村づくりについて検討、実践するために二〇〇八年度に結成された自主研修的な組織。現在のメンバーは十四人。リーダーは係長だが、その他のメンバーは各課の主任以下で構成される。本来業務の合間を縫って会合を開くため、時間外の活動が多いという。

今回のペイントは景観づくりを目指した取り組みの一つ。ペンキの色は町の田園風景に配慮し、こげ茶色を選定した。また、積雪期に目立つ色であることから事故抑止効果も期待される。

PTの事務局となっている政策調

整室は「今回の取り組みは事業ではなく、研修の一環として試験的に実施した。来年度以降も行うかどうかは、反響を見ながら決める」としている。

町の「知恵袋」を募集 ―栃木県那須町

栃木県那須町は、専門知識や経験を持った人を登録し、町政の課題などに助言してもらう「町の知恵袋（タウンズブレイン）」事業を始めた。別荘地で転入者が多い特性を生かした協働のまちづくりが狙い。

町民かどうかは問わず、県議や町議とその候補者のほか、暴力団関係者、自身や特定の団体の利益を拡大しようとする人は除く。「まちづくり」「産業・技術」「生活・福祉」など分野ごとに登録してもらい、必要に応じて庁内の各課が助言を求める。

同町には別荘が多く、転入者が毎年百人程度おり、町全体の人口は横ばいが続いている。退職後に移住した団塊の世代などのノウハウを引き出し、地域との交流を促進させる必要があると判断した。

町企画財政課は「町の特殊性を生かし、企業戦士として働いてくれた方たちにまちづくりにかかわって

いただきたい」としている。

カレーパンでまちおこし！ ―大阪府東大阪市

東大阪市の、カレーパンを新たな市の名物にする取り組みを進めている。若手職員でつくる「東大阪市の魅力アピール推進会議」が、地元の大学と共同で四種類の独自メニューを開発中で、十二月には同市の花園ラグビー場で開催される全国高校ラグビー大会で、来場者に三百個を無料配布する予定。「ラグビーの街」に加え、新たに「カレーパンの街」としてまちおこしを図りたい考えだ。

同市は、花園ラグビー場があることから、一九九一年から「ラグビーの街」としてPRを展開している。昨年、同会議で「新たな市の名物を作ろう」と検討したところ、カレーパンの形がラグビーボールに似ていることや、同市にあるハウス食品の工場で一九二六年に初めてカレー粉が製造され、同工場での製造が終了した二〇〇三年まで、周辺にカレーの香りが漂っていたことを理由に、カレーパンを市の「B級グルメ」とする案が浮上したという。

市内の二大学の学生にレシピ開発を依頼。九月初めには市主催の試食

会を開き、参加した地元商工会議所や市職員らが、「フルーツいっぱいココカレーパン」「おでんカレーパン」など全四種類を選定した。今後さらに改良を重ね、十二月までの完成を目指す。また、市民や観光客向けの「カレーパン・マップ」を作製することも検討しており、市の活性化につなげたいとしている。

地域振興で「協議会」設置促す ―大分県臼杵市

臼杵市は、高齢化の進行に備え、地域コミュニティを強化するため、「地域振興協議会」の設置を促進している。今年度の事業費は二百万円。協議会は、十九ある旧小学校区ごとに地域の自主的な判断で設置できる。名称や活動内容も個別に決めることが可能。

現在、二団体が設立されており、高齢者向けの生涯学習教室や防災意識を高めるための委員会、男性高齢者を対象とした調理教室などが開かれている。

市は、地域活動への財政支援や各地域出身の職員が活動に参加するなどの支援を行う。市コミュニティ推進室は「地域の人々の顔が見える関係をつくることで、地域の一体感を醸成したい」と話している。



上尾市長 ● 島村 穰

「思いやりある市政」実現へ全力

上尾市は、首都東京から約三十五キロメートルの距離にあり、埼玉県の南東部に位置しています。江戸時代には五街道の一つである中山道の宿場町として栄え、近代では地理的条件の良さから、田園都市から工業都市そして住宅都市へと変貌し、現在、人口は二十二万六千人を超え、県内の中枢をなす都市へと発展してきました。

本市では、市民サービスの質の向上を目指し、ISO 9001の認証取得や市民生活に直結する窓口部門の土日開庁を実現するなど、全国に先駆けた施策を数多く展開し、「住んでよかった」「住み続けたい」まちとして、着実に発展しています。

昨年は市制施行五十周年の佳節を迎え、さまざまな記念事業を開催しながら祝うことができました。

現在、上尾市が進めている重点施策として、上尾駅のバリアフリー化を伴う改修事業があります。上尾駅は明治十六年、高崎線開通と同時に設置され、昭和四十四年に橋上駅となりましたが、四十年が経過し、多くの皆さまから、一日も早い改修が望まれていました。

市では、上尾の表玄関にふさわしい、夢のある駅を目指して、平成十四年七月、市民二十人の委員による「JR上尾駅改修等に係わる研究会」を、また、平成十五年六月に「JR上尾駅整備等検討委員会」を設置し、それぞれの立場からの検討をお願いしました。

委員の皆さまからいただいた貴重なご意見やご要望をもとに、JR東日本高崎支社と粘り強く協議を重ねながら合意形成を図り、平成十九年五月に着工することができました。

完成後は、駅の東西を結ぶ自由通路の幅が、現在の八割から二十割に広がり、利用者の安全性・快適性・利便性の向上が図られます。

また、催し物等の開催場所や団体等の待ち合わせ場所として利用されることにより、交流の促進・賑わいの創出が図られ、若者から高齢者まで多くの世代が集える空間となります。

間となります。

多くの方が利用する駅は、市の顔ともいえる存在です。人が集い、誰もが利用しやすい駅に生まれ変わりますので、平成二十二年度末の完成を楽しみにしてください。

上尾市は、荒川や綾瀬川の河川、原市沼川などの水辺環境など、良好で美しい里山的自然景観が残されており、四季折々に趣があります。

『春』には、桜の名所として、記念切手シート「2009さくら紀行 関東五〇選 埼玉編」で選ばれた「上尾丸山公園」の桜が満開になります。

『夏』には、毎年八月の第一土曜日に「あげお花火大会」が開催されます。県内最大級の約一万三千発の花火を打ち上げ、県内だけでなく関東近県から毎年十七万人近い来場者を迎えます。夜空を彩る花火が与えるひと時の清涼感や爽快感は、夏の暑さを忘れさせるイベントとして広く愛されています。

『秋』には、八千人を超える参加者を誇る「上尾シティマラソン」が開催されます。このシティマラソンは、日本陸連の公認コースとして高い評価を得ていることから、箱根駅伝に参加する多くの大学が集結し、本番にむけての選手選抜や調整のための大会としても定着しています。

『冬』には、JR上尾駅を幻想的に彩る「あげおイルミネーション」がお客様を迎えます。市内中学校美術部の作品をはじめ、親子の手作りイルミネーションが皆様の心を温かくもてなします。

このように、暮らしやすく魅力ある街づくりを第一に掲げ、各種施策を積極的に展開しています。

市民の皆さまに「住んでよかった」と心から実感していただけるよう、「こどもからおとしよりまですべてに優しい思いやり市政」の実現に向けて、全力を傾注してまいります。ぜひ、皆さまも四季それぞれに顔がある上尾市にお立ち寄りください。

鳥取千年往来

この風景は、およそ千年前と変わらない。

人の通る道もない標高五二〇mの岩壁に建つ三徳山三佛寺の奥院「開宝」投入堂は、約千年も以前に建立された神社様式建築です。我々の先人たちが通かな昔からずっと、砂丘や大山と同じように、奇跡のお堂を誇らしく眺めていたのでしょうか。
「この風景は、およそ千年前の鳥取です」そんな台詞も、ごく自然に言えるくらい、今も鳥取は、ゆつたりと流れるときの中にあるのです。

三徳山 大山

三徳山 開宝

三徳山 開宝

三徳山 開宝

鳥取砂丘

鳥取県

(社)鳥取県観光連盟

鳥取県

都道府県漫遊
POSTER GALLERY

地域づくり

2009・11月号 46

緑と文化が薫るふれあいの まちを目指し



■市内公園のバラ（市の花に指定）

綾瀬市は神奈川県のほぼ中央に位置し、都心へ約40km、横浜へ約20kmという交通に便利な首都圏域にある。清流の宝石といわれ市の鳥にもなっているカワセミや、川の香魚アユが見られ、また、夏の夜空にホテルが舞うなど自然風土にも恵まれた都市環境である。

歴史的には、市内の遺跡から約4万年前の南関東最古級の石器が見つかり、旧石器時代から人が住んでいたことが分かっている。江戸時代には、徳川3代将軍家光の乳母として知られる春日局の所領があり、ゆかりの品々が残っているなど、身近なところに重要な歴史資料がある。

春には市内の公園で桜や市の花バラが咲き誇り「綾瀬緑化フェア」など自然を楽しむ催しが行われる。夏には市内最大イベントである「綾瀬いきいき祭り」がある。完成当時、日本で2番目の大きさを誇ったふれあい大釜で作った、名物豚すきの無料配布をはじめ、市民手作りの祭りが繰り広げられ、尺五寸玉など約2000発の花火が打ち上がり盛大なフィナーレを迎える。



■ふれあい大釜で作る名物
豚すき

秋には「あやせ文化芸術祭」「あやせ環境展」など、さらに冬には光の祭典「綾瀬イルミネーション」があり、高さ8mのツリー、延長20mの光の滝、光に包まれた回廊などが出現し、約4万球の電飾が冬の夜を幻想的に彩る。

「緑と文化が薫るふれあいのまち あやせ」を将来都市像と定め、活気ある魅力的なまちづくりに取り組んでいる。



■市内で発見された約4万年前の石器群



■清流の宝石カワセミ（市の鳥に指定）



■日本有数の大きさを誇る
ふれあい大釜



■春日局ゆかりの品々



■光のツリーと光の滝



■幻想的な光の回廊

通信センター

「第27回地域づくり団体全国研修交流会 佐賀大会」参加者募集中！



○主催：地域づくり団体全国協議会
佐賀県地域づくりネットワーク協議会
第27回地域づくり団体全国研修交流会佐賀大会実行

全国各地で地域づくりに取り組む方々と情報交換や議論を行う「地域づくり団体全国研修交流会佐賀大会」を開催いたします。

○日時：2010年2月5日（金）・6日（土）

○前夜祭：2月4日（木）
※参加希望者のみ。参加費は別途必要になります。

○会場：（全体会）佐賀市文化会館 中ホール
（分科会）県内13会場

委員会

○対象：地域づくり団体関係者、行政関係者、地域づくりに関心のある方

○参加費：7,000円

※ただし、この他に現地経費が別途必要になります。

○申込期限：2009年11月30日（月）必着

※詳しくは「地域づくり10月号」に同封した参加者募集のご案内、地域づくり団体のひろば、または佐賀大会のホームページをご覧ください。

《地域づくり団体のひろば》

<http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/dantai/dantai.htm>

《佐賀大会ホームページ》

<http://saga-chiikinet.saga-cs.org>

《お問い合わせ先》

研修交流課 TEL 03-5202-6134

水と土の芸術祭2009

— 7月18日から12月27日まで新潟市で開催中 —

「水と土」という、大きなテーマを掲げた芸術祭です。

この芸術祭が開催されている新潟市は、信濃川と阿賀野川の最下流。2つの大河が運んでくる大量の水と多様な土と深く関わりながら生活が営まれ「水と土」とともに育まれた歴史文化が各所に色濃く残されています。こうした「水」の記憶、「土」の匂いをアートによって呼び起こし、繋ぎ合わせて迎えるのが「水と土の芸術祭」です。

世界13カ国から集まった61作家が制作した71の作品が「水と土」の景観とともに迎えてくれます。

例えば、かつて東洋一と謳われた「栗ノ木排水機場」の遺構には、フィンランドの作家マーリア・ヴィルッカラによるフロントガラスを敷き詰めた作品。青空や流れる雲を反射して、往時の水面が蘇ったよう。ここはかつて地図にない湖と呼ばれた広大な湿地を乾田に変えていった施設。「水と土」を巡る環境と人間との闘いの物語が思い起こされて目に見る以上の感動がこみ上げてきます。

「水と土」というテーマは、新潟という地域のアイデンティ

ティ探しを超えて、この環境の時代に、未来の希望を見出す示唆を与えてくれているようです。「水と土の芸術祭」は人類再発見の旅でもあるのかもしれない。

詳しくは当芸術祭ウェブサイト

<http://www.mizu-tsuchi.jp/> をご覧ください。

ぜひ「水と土の芸術祭2009」まで、お越しくださいますよう、お願いいたします。

【お問い合わせ】水と土の芸術祭実行委員会 事務局（新潟市交流推進課内）TEL 025-226-2627



マーリア・ヴィルッカラの作品



都市と自然のつながりを象徴する王文志の作品

書籍紹介

地域ブランド戦略ハンドブック

ブランド戦略コンサルタント薫習房代表 二村宏志・著
（ぎょうせい2,857円＋税）

各地で自治体や民間事業者、商工会・商工会議所などが一体となり、地域資源を活かした新商品や観光資源の開発を模索している。こうした地域活性化への取り組みの際、「地域ブランド」という言葉がしばしば使われている。

ところが現実には、地域ブランドについて「有効なマーケティング活動が行えない」「消費者ニーズに適した商品が開

発できない」などの理由で、取り組みが遅れている自治体や中小企業者も少なくない。本書は、そうした関係者が効率的な地域マネジメントを実践するための指南書である。

独自のブランド・マネジメント論を構築した筆者は、これまで全国70カ所近い地域ブランド事例を実地に調査・研究し、実用的な視点から地域マネジメント手法を開発。地域の個性化や地域経済の活性化に向けて、その援用を提唱する。

地域ブランドを成功させるために、真に役立つノウハウを提案・解説している。

地域ブランド戦略ハンドブック



11月

★日本橋プラザビルイベントスペース

- 11月5日(木)～6日(金)
加西市(兵庫県)
- 11月12日(木)～13日(金)
菊川市茶業協会(静岡県)
- 11月27日(金)
矢板市(栃木県)

★ふるさと情報プラザ

- 11月4日(水)～6日(金)
『京都・伝統工芸「友禅小紋展」』
京都府
- 11月9日(月)～13日(金)
『越前焼の魅力』越前町(福井県)
- 11月16日(月)～20日(金)
『福島県三島町の観光・物産展』
三島町(福島県)
- 11月25日(水)～27日(金)
『「たかはら山麓水街道フェア
2009」～清らかな水の恵みを届
けます～』栃木県



12月

★日本橋プラザビルイベントスペース

- 12月1日(火)～2日(水)
新見市・千屋牛振興会(岡山県)
- 12月7日(月)～9日(水)
滝川市産業活性化協議会(北海道)
- 12月16日(水)～18日(金)
伊勢市(三重県)
- 12月21日(月)～22日(火)
長野市の観光と物産展実行委員会
(長野県)

★ふるさと情報プラザ

- 12月1日(火)～4日(金)
『紀州湯浅の食・観光フェア』
湯浅町(和歌山県)
- 12月7日(月)～9日(水)
『りんごの里 信州小川フェア』
小川村(長野県)
- 12月10日(木)～11日(金)
『高原のふるさと南箕輪村からの
贈り物』南箕輪村(長野県)
- 12月14日(月)～16日(水)
『愛と和のまち 椿のまち 野々市』
野々市町(石川県)
- 12月17日(木)～18日(金)
『環境王国 福島県天栄村「こだわ
りの食材」』天栄村(福島県)
- 12月21日(月)～22日(火)
『ヨイヤセ!!とよさと～滋賀県
豊郷町からの発信～』
豊郷町(滋賀県)

(写真)

- 1 下郷町(福島県) 9月9日(水)～10日(木)
- 2 鶴岡市観光連盟(山形県) 9月14日(月)
～15日(火)
- 3 松川町(長野県) 9月17日(木)～18日(金)
- 4 厚木市(神奈川県) 9月28日(月)～10月1
日(木)
- 5 滋賀県10月5日(月)～9日(金)

【編集後記】

▼国内のどの市町村にも、大小さまざまな河川があります。これらの川と向き合う行政や住民の視点は、従来の治水対策や環境保護などに加え、新たに集い憩える河川空間を整備し、水辺のにぎわい創出を地域づくりにどう活かしていくかという面にも向けられています。

▼そこで、今月の特集テーマは「川を活かしたまちづくり」としました。国交省が今年度から実施した「かわまちづくり」支援制度を踏まえ、地域と河川の共生について専門家の解説とともに、地域の取り組み事例を紹介しました。

▼川と地域の関係はさまざま。その中で「川の駅」を広げる全国的な動きも活発です。官民協働の活動状況を報告していただきました。川は源流から海に注ぎ込むまでに、上流・中流・下流それぞれの地域で、多様な文化を育くみ、自治体と接しています。川の駅のネットワークを拡充し、広域的な連携を図る動きは、今後も広がりそうです。

▼地方映画祭は今や、各地で盛んです。長野県上田市で、地域ぐるみで取り組む映画のロケ隊誘致活動と、同市を舞台に制作されたアニメ映画「サマーウォーズ」をめぐる地元盛り上がり報告いただきました(「北から南から」欄)。映画というソフト産業が地域の経済・文化・観光面にどこまで効果をもたらし、地方の元気につながるのか。興味深いところです。

(原田)

【12月号予告】

特集IIソーシャル・ビジネスを活用した

地域づくり(仮)

地域づくり11月号

2009年11月1日発行 編集・発行=財団法人地域活性化センター

東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131(代) <http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/> 印刷・製本/株式会社丸井文工社

法律で許可された場合以外に、本誌からの無断転載を禁止します

落丁・乱丁はお取り替えます。情報サービス課(03-5202-6135)まで、ご連絡下さい。

「調べ」をどうぞ。

宝くじ当せん金の引き換え期限は一年間です。
買ったらず、早めの当せん調べをお願いします。

宝くじの収益金は、
身近な街づくりに役立っています。



当せんはしっかり調べて、しっかり換金。



財団法人 **日本宝くじ協会**

<http://www.jla-takarakuji.or.jp>